高山祭、鳩峯車・鳳凰臺・牛若臺・恵比須臺所蔵の
旧用幕の調査（報告）

令和２年３月

一般財団法人 西陣織物館 顧問

藤井 健三

■高山祭、鳩峯車・鳳凰台・牛若台・恵比須台所蔵の旧用幕の調査（報告）。

●調査概要

実　施：令和２年(2020)１月１４日（月）～１５日（火）。
　　１月２７日（月）～２８日（火）。

場　所：「飛騨高山まちの博物館」（岐阜県高山市上一之町７５番地）。

対　象：１月１４日（午後）～１５日（終日）。

・高山祭・秋祭・八幡祭（櫻山八幡宮例祭）　鳩峯車。

Ⅰ）旧前幕　「雲龍波濤図　綴織」。

Ⅱ）旧胴幕（左）　「唐人海岸談笑図　綴織」。

旧胴幕（右）　「唐人浜邸遊苑図　綴織」。

Ⅲ）旧本懸用見送幕　「日月立人物図　毛綴織」。

Ⅳ）旧替懸用見送幕　「鳳凰額・高士遊苑図　綴織」。

Ⅴ）旧水引幕・小壁　「緋地牡丹蝶文様　刺繍」。

「緋地菊蝶文様　刺繍」。

Ⅵ）旧天井幕　「宝相華唐草文様　更紗染」。

１月２７日（午後）

・高山祭・春祭・山王祭（日枝神社例祭）　日枝鳳凰臺。

Ⅰ）旧胴幕（一枚物）　「縹地雨龍図　刺繍」。

Ⅱ）旧天井幕　「宝相華唐草文様　更紗染」。

１月２８日（午前～午後）。

・高山祭・秋祭・八幡祭（櫻山八幡宮例祭）牛若臺（休台中）。

Ⅰ）旧天幕　「紫色無地　縮緬」。

Ⅱ）旧大幕　「猩々緋無地　羅紗」。

Ⅲ）旧水引幕　「雲龍図　墨絵」。

Ⅳ）旧水幕　「浅葱地紗綾形縞　木綿」。

Ⅴ）旧敷物　「緋色無地　羅紗」。

Ⅵ）旧飾り房　「黒色飾り房」。

１月２８日（午後）

・高山祭・春祭・山王祭（日枝神社例祭）恵比須臺。

Ⅰ）見送幕　「異国人図　綴織」。

Ⅱ）旧敷物　「緋色　毛氈」。

●祭礼の概要

・高山祭屋台は昭和３５年(1960)に国の重要有形民俗文化財の指定を受け、また高山祭の屋台行事も昭和５４年(1979)に国の重要無形民俗文化財の指定を受けている。さらに平成２８年(2016)にはユネスコ無形文化遺産に登録された「山・鉾・屋台行事」の一つとしてある。高山祭と称され

るこの行事は春に開催される高山市城山の日枝神社の例祭「山王祭」と、秋に行われる高山市櫻町の櫻山八幡宮の例祭「八幡祭」の両者を一つに括って高山祭行事として総称されている。

・春祭の日枝神社・山王祭は４月１４日と１５日に行われ、日枝神楽臺、三番叟、麒麟臺、石橋臺、五臺山、日枝鳳凰臺、恵比須臺、龍神臺、崑崗臺、琴高臺、大国臺、青龍臺の１２基の屋台が参加する。日枝神社の起源は近江の日吉山王を永治元年(1141)に勧請して奉ったのを最初としている。

・また、櫻山八幡宮の秋祭・八幡祭は１０月９日と１０日に行われ、八幡神楽臺、布袋臺、金鳳臺、大八臺、鳩峯臺、神馬臺、仙人臺、行神臺、宝珠臺、豊明臺、八幡鳳凰臺、神楽臺、神楽臺の１３基の屋台が参加する。神社の起源は古く、仁徳天皇６５年(377)に大和朝廷に背く怪人の両面宿儺を難波根子振熊が征伐をする際、戦勝祈願のために奉ったと伝えているが、『和漢三才図絵』には大永年中(1521-1528) に京都の岩清水八幡宮の神を勧請して始まったとし、元和９年(1623)に金森家居城の北面の守護神として再考されたものである。

・春と秋の祭事は旧高山城下町を南北に二分する安川通りを境に、その北側を八幡祭の区域とし、また安川通りを境に南側を山王祭の区域としている。

・屋台についての記録は「享保元年(1716)　山王祭り（春）と八幡祭り（秋）に代官所の前で行列を披露し」と最初の記載が見られ、また享保三年(1718)の記録に「高山八幡祭礼行列」とあり、「だし一本　笠鉾　屋だいは高砂・猩々・湯ノ花・浮島太夫夫婦の四台」を曳き出したとある。これは江戸の赤坂山王祭りや神田明神祭を模したものといわれていて、その後に笠鉾や山車は消えたが、屋台が残ってその５０年から６０年後にからくり人形が取り入れられ、屋台も単層から重層へと変わったと推測されている。文化文政年間(1804-30) には高山独自の屋台が形成され、彫刻技を競って絢爛豪華な懸装品も飾られるようになったとされている。

（「平成１２年２月２７日『屋台囃子の発表会と講演会』資料、高山教育委員会・高山屋台保存会」から抜粋）

●調査報告（「鳩峯車・鳳凰臺・牛若臺所蔵の旧用幕類の調査」）

◆秋祭「鳩峯車」（櫻山八幡宮例祭「八幡祭」）所蔵の旧幕類。

・今回、鳩峯車所蔵の旧用幕で調査を行った幕は以下の６種（１１枚）であるが、これらのうち旧天井幕を除いて他の幕は京都の川島織物によって近年に復元新調による製作が行われており、その際に修理が必要だった箇所については補填、修繕、裏打などが施され、修理後の旧幕類は鳩峯車組で保管されている。

Ⅰ，旧前幕		「雲龍波濤図　綴織」	１枚
Ⅱ，旧胴幕	（左面）	「唐人海岸談笑図　綴織」	１枚
	（右面）	「唐人洋邸遊苑図　綴織」	１枚
Ⅲ，旧見送幕	（本懸）	「日月立人物図　毛綴織」	１枚

Ⅳ，旧見送幕（替懸）　「鳳凰額高士遊苑図　綴織」　１枚
Ⅴ，旧水引幕　「緋地牡丹蝶文様　刺繍」　４枚
「緋地　菊蝶文様　刺繍」　７枚

（参考調査幕）

現前幕　「雲龍波濤図　綴織」　（川島織物製）１枚
現胴幕　（左面）　「唐人海岸談笑図　綴織」　（川島織物製）１枚
（右面）　「唐人洋邸遊苑図　綴織」　（川島織物製）１枚
現見送幕（本懸）　「日月立人物図　毛綴織」　（川島織物製）１枚
現見送幕（替懸）　「鳳凰額・高士遊苑図　綴織」（川島織物製）１枚

・鳩峯車組に遺されている人形の収納箱に「延享四年(1747)う八月祭人形」があることから、同車は延享４年もしくはそれ以前の創建が考えられており、延享４年は八幡祭礼が始まって３０年後のことであって、屋台創建が祭礼開始の早期にあったことを物語っている。組所蔵の幕箱に「享和改元辛酉七月　雲龍縫屋臺幕一帳　並翠簾一連　真紅紐二筋　大津繪組」と見られ、当初は大津絵組を称していたようだが、屋台に雲龍図の刺繍幕を懸装していたことの知れる幕は現存していない。寛政１１年に屋台の改造に着手し、同年に完成をしており、その際に調整された幕が現存している旧幕類なのではないかと考えられている。

〇各幕の調査（概要）

Ⅰ）旧前幕　「雲龍波濤図　綴織」（１枚）

1)仕様について

a)伝承（概要）

・鳩峯車組に古くから伝わる幕で、昭和５５年の新幕新調まで屋台に懸装されていたものであり、天保８年に２０両で京都から購入（『春圃日記』）したことを伝える。
・昭和３１年(1956)に幕の修理が行われたが、昭和３７年(1956)に再び幕の損傷を見ている。
・昭和５４年度事業として京都の川島織物で復元新調の新幕製作が行われ、昭和５５年に新幕が完成する。旧幕は木箱に収納して保管している。

b)形態

・約１ｍ強の少し縦長の四方形に作られ、画面上方に瑞雲を、中央に正面向きの龍１頭と中心に向き合う２頭の龍を配し、下方に山岳と波濤図を著して綴織で製作している。そしてこの本紙部のみで幕面を構成して作られており、本紙の左右端部分に僅かに裏地を折返して仕立てている。幕上辺の端部に吊板を通して懸装に役立てている。
・本幕は昭和５５年の新幕新調の際、川島織物で修理が行われており、表面の雲龍図綴織に和紙を用いて裏打ち補正を、また永年に生じた欠損や損傷部に裂地の補填と修繕が行われている。なお和紙の裏打作業で用いられた糊材によって綴織の風合に少しく硬化がみられ、また彩色にも僅かに色泣きが生じて見られる。

・裏面は白色無地の麻布を用い、左右辺の縁各２ヵ所に紐付けして懸装時に幕の固定を図っている。

c)寸法

外寸　…縦：１１００㎜　×　横：８９２㎜。

内寸　…縦：１１００㎜　×　横：８８２㎜。

（附：「図１」参照）

d)製作の仕様（素材、技法）

・幕表面

本紙　…「雲龍波濤図　綴錦」

図様　…上方に瑞雲と宝尽しと３頭の龍、そして下方に山岳と波濤を織り著す。

加工　…綴織（平組織緯畝地・地絵緯交替・錦）

経糸…材：絹（白）、撚：Ｓ／２Ｚ、密度：４２／曲寸。

緯糸…材：絹（色）、撚：Ｚ／２Ｓ、密度：９０～１５０／曲寸。

（紅：３、青：４、藍：３、萌葱：３、褐：３、

黒：１，他）

：丸金糸、撚：Ｚ、綿芯、密度：90～ 150／曲寸。

（金色：４種、３～５掛を使用）

・幕裏面

裏地　…白色無地麻布

図様　…無地

寸法　…表面に同じ

素材　…麻布

経糸　…材：麻、密度：７９／曲寸。

緯糸　…材：麻、密度：５５／曲寸。

織幅　…３３２㎜以上の小巾織物。

加工　…小巾の麻布を３枚接ぎにして、ミシン縫合（再仕立時）で仕立てる。

2)考察

表面「雲龍波濤図　綴織」

・３頭の龍と瑞雲、宝尽しに霊岳波濤を描いた図で、中国明代および清時代の官服の意匠や宮中の調度品を飾るための染織品に多く見られた図柄である。本幕はそうした製品の図柄を倣って日本で製作されたものである。本図の元となった織物はその図様から椅子懸用の綴織作品ではなかっただろうか。また図中の龍の指が５本ある図を５爪龍と呼んで天子用の備品とし、また４爪以下を官僚用とするが、こうした制度も明代と清代初期までのことで本図の頃には乱用されていたようで、画稿の内容を規定することはない。

・本幕は昭和５５年に復元仕様で新幕の製作が行われる。その時に川島織物によって幕の裏面を詳細に調査して新幕の色彩再現に供したと伝えている。現在、本幕の綴織部の裏には和紙による裏打ちが見られる。昭和５５年に本幕を解体して調査後に和紙の裏打後に仕立て直し

を行ったのといえる。裏地や縁の紐は旧材をそのまま用いているものと思われる。

裏面「白色無地麻布」

・小巾の麻布を３枚接ぎで仕立てるも、生地も古い材ではなくミシン縫合で行われている。昭和３１年に行われた修理で旧材から交換しものと思われる。付属の紐も同様だろう。

3)備考

（幕入手に関する文献等伝承について）

・鳩峯車組が本幕を入手した経緯を組に遺る古文書から探るならば、鳩峯車組の柿下家当主四代から八代が書いた日記『春圃日記』が遺されており、その「天保六年十月朔日　上天気　今日新町方より又吉昼立にて上京につき注文左之趣組内屋臺入用見送りの織物は出来合之有趣故急便で送り見せ候様申し越（略）」、また「十月二十九日　昼前天気昼後より少し雨降り　京都にて又吉より兼て注文致遣わし候屋臺見送り到着致候此訳見送り上壱枚次弐枚小巾物壱枚横弐枚都合六枚請取此目方壱貫五百匁駄賃〆て四匁五分少々（後略）」、「十一月七日　天キ　新町の又吉先達て上京の処一昨日帰宅にて当屋臺入用の幕代物書入候　唐物見送り龍見送り代弐拾両前掛清平織拾弐両横幕清平織三十五両今織横立弐枚〆代拾両九両一拾九両也右之書附請取申候并遺被物代金帳記之通相渡候」、「十一月九日　雪降り今朝夕方迄に壱尺二・三寸積り　屋臺方入用幕一昨日之夜町又吉帰宅に付値段知れ候間山清屋松源屋池庄屋右之衆中当方へ打寄相談仕候尤先日参りし節仮値段見斗一統へ申入候処高料故と申事に仮値段唐物見送り五十両前掛弐十両横弐枚六十両と申置候然るに本値段ハ四十七両也（後略）幸便ニ不用分唐物壱枚新出来弐枚は返済いたし残三枚預り置（後略）」とある。

・この文面からして天保６年(1835)１０月１日に上京する柿下家奉公人の又吉（柿下家の親類、新町住、大新町日下部家・谷屋九兵衛の番頭）に、屋台用の見送幕は出来合いでよいから早々に急便で送って見せるように伝え、１０月２９日にそれらが届いて、その内訳は見幕の上作が１枚と次の作が２枚、小さい物が１枚、そして横幕用が２枚の都合６枚が届き、重量が一貫五百匁で運送料は四匁五分少々だったとある。その後の１１月７日には京から帰宅した又吉から幕の仮値段を聞き、唐物見送りの龍見送りが２０両、前掛清平織が１２両、横幕清平織３５両、今織横立弐枚が１０両と９両で１９両と記した書付を受け取って代金策をする。しかし１１月９日に町の旦那衆が談じた結果、仮値段を唐物見送り５０両、前掛２０両、前掛が２０両、横弐枚６０両と申していたはずだが、横弐枚は４７両で済むこととなり、幸いに便があって６枚の幕の内から唐物見送幕１枚と新作の２枚を不用として返却し、残りの３枚を購入したある。つまり前掛清平織（１枚）の２０両と横幕清平織（２枚）のまた４７両）が購入されたと考えられ、現在も旧幕として伝えられている前掛幕「雲龍波濤図　綴織」の１枚と胴掛幕「唐人遊苑図　綴織」左右面の２枚の幕だと考えられる。

・そして不要で返却した幕を、唐物１枚と新出来２枚と記していることから、この新出来２枚の幕以外は既成の幕、つまり中古品をも含めて出来合いの幕だと考えられる。既に『春圃日記』の「天保六年十月朔日　上天気　今日新町方より又吉昼立にて上京につき注文左之趣組内屋臺入用見送りの織物は出来合之有趣故急便で送り見せ候様申し越（略）」とあるように、

元より既成の織物を入手することを考えていたのだろうと思われる。

・また続いて『春圃日記』の天保９年(1838)の条に「六月二十五日　当組屋臺見送り幕先達より加が屋又吉上京の節相尋ね候処唐物毛織綴り一枚代金弐拾六両図柄の手本来り候へ共代物は見せ申さず趣（中略）新町中西上京に付代金弐拾六両持たせ差遣はし候云々」とあって、天保９年６月に又吉が上京の折に唐物毛織綴を２６両で購入の商談するも、その図様は届いても幕が届かなかったので、新町の中西が上京する際に２６両を持たせて支払ったことを記している。そしてこの文中の「毛織綴り」という用語についてだが、まだ当時は「毛織綴り」が一般的な用語でなく、京都の祇園祭で化物氈などと称された獣毛を用いた極々特別な織物を指して使われていたのであって、巷に流通していた中国や邦製の絹綴織に対して用いられた言葉ではないことから、この文面にある「毛織綴り」の幕は現在も鳩峯車組に遺されている旧見送幕「日月人物図　毛綴織」を指していたことの想定ができる。それからも旧本見送幕「日月人物図　毛綴織」は天保９年に購入されて幕に仕立てられたものだと考えられる。天保６年から９年にかけて当初から念願だった３種４枚の幕が組に揃えられたことになる。

・ただしこれら３種４枚の幕にはその前身となる古幕（旧々幕）があったことが窺え、そのことが町の古文書『享和元年(1801)辛酉十月日　幕翠簾出来并奉加取立覚　大津絵組　九軒扣』に記されている。それには白羅紗地に金糸雲龍図の刺繍幕を京都で作らせた時の子細（「京都日野屋　理右衛門　一金六両壱分　白羅紗弐疋　一金拾両　雲龍之縫　龍金糸其外　色糸雲黒糸　右糸口唐より糸口眼入　縫手間代共　（以下略）」）と幕製作に要した子細を金額共に記している。この時の幕生地に用尺として２疋を使っていることから多分に屋台周囲に懸け延した一枚物の幕だったのが想像できる。屋台は寛政１１年(1799)に改造に着手して享和元年に完成し、その新屋台に合せて製作されたのが雲龍図の刺繍胴幕で、今も組に遺る古箱「享和改元辛酉七月　霊龍縫屋台幕壱帳　並翠簾一連　真紅紐一筋　大津絵組」が幕の収納箱だと考えられる。この時の屋台には見送幕や前幕を懸けて用いなかったのではないだろうか。その後の文政９年(1826)に屋台が大破したため休台とするも、天保６年(1835)に屋台の再改造を始めて８年(1837)に完成しており、この時に鳩峯車と改名して新屋台の形状に合せた見送幕、前幕、胴幕が調整されたと考えられる。

・また『寛政十一年(1799)未年八月改　祭礼年々勘定帳』に、「文化十二年(1815)　壱匁五分　上龍幕惣直代　池庄取かへ」、「文政三辰年(1820)　一四百六拾九文　長瀬屋四郎拂　是ハゑそ錦幕メ紐口口壱丈九尺代　口ヲ口口毛錦三尺六寸代　外金弐両　ゑ曽錦上段幕う八月十二日　小嶋屋勘右ヱ門取次ニ而買代金　坂清ヨリ取替拂　卯八月ヨリ当七月　利九匁六分十二ヶ月」とあって、ある卯の年に蝦夷錦の天幕を２両で購入しており、それを文化１２年(1815)に総じて修繕をし、また文政３年(1820)にメ紐を付けたことが記されている。さらに『天保九戊戌年(1838)八月歳々勘定記』に、「安政弐乙卯年(1855)八月　一壱貫弐拾文　天幕浦打賃　京屋拂　一百七拾文　同仕立賃　広瀬屋長兵衛　拂」とあって、天幕の裏地を付けたことが解る。加えて別の古文書（紙片）に「辰　此ゑぞ錦ハ明治二十八年頃屋台改造前迄使用シタル棟天井下幕ナラン紫紺地雲龍模様ナリシ（后ミスニ替ル）　昭和七年九月　柿下清六識」が見られることと、明治２５年に上段の翠簾の４面を京都で新調していることから、明治２５年迄は上段に紫紺地雲龍文様の蝦夷錦が懸装されていたことがいえる。なお修

繕をした文化１２年(1815)より前の卯年は文化３年(1806)となり、この頃に調達されたものだろうか。修理に「惣直し」とあって入手時点で相当の損傷が見られる状態だったのだろうか。

・ところで蝦夷錦とは、中国の清朝時代に册封政策によって属国に授与された官位衣装（官服）が後に巷に流布したもので、とくに北狄、東夷の民族から流出して松前藩を通じて本土に流通したことから蝦夷錦と呼ばれた。一般に朝服や常服と呼ばれる形式の中国製の錦織が多く、我が国の祭礼に重宝して用いられている。

（清平織について）

・さて、ここで天保６年の文中に見られる「前掛清平織拾弐両横幕清平織三十五両」の清平織とはどのような織物を指しているのだろうか。文面からもここに記される前掛幕と両横幕は天保６年に町が購入した幕のことで、現在も町に遺っている旧前掛幕　「雲龍波濤図」１枚と旧胴幕左右「唐人遊苑図」２枚の綴織幕ことであり、これらの綴織を指して清平織と呼んでいるのが解る。また文中では綴織を唐織と清平織そして今織に呼び別けて記しているおり、当時の京都や地方で綴織を区分けして呼んでいたのが窺われる。では、ここでいう唐織、清平織、今織とはどのように呼び別けていたのだろうか。また清平織とはどのような綴織だったのだろうか。記録からは知り得ないが、用語からすれば唐織は中国製、清平織と今織は日本製の綴織で、今織が新作の綴織ならば清平織はそれ以前の綴織といえる。天保年以前の綴織はといえばまだ日本製の綴織が始まって５０年頃で完成前の綴織作品を思い起こされる。そこで憶測になるが、一つの手掛かりがある。まず祭礼幕の製作技法として綴織の技法が何時から存在したかを問うに、綴織は法隆寺宝物や正倉院宝物の中に遺されていることからも古代飛鳥・奈良時代からあって、また平安時代にも当麻曼陀羅図の大作が伝えられている。しかしそれらが我が国製かといえば実はそうではなく、また平安時代を最後にして綴織が日本で見られなくなってしまう。しかし中国では刻糸と呼ばれて作り続けられており、作品は日本にも渡来して江戸期には祭礼用懸装品として相当の舶載が見られる。そんな綴織が我が国で行われるようになったのは江戸中期頃だった。織技としても簡単だった綴織が何故に日本で行われなかったかは多分に諸糸撚糸の技術に関わっいると思われるが、ここでの説明は避けたい。日本で江戸中期に綴織技法が始まったのき京都太秦の仁和寺界隈においてで、西陣織屋の下で寺侍らが内職で始めたと伝えられていて、多くの名工が輩出したと伝えている。江戸後期の西陣織物を詳しく記した弘化２年(1845)刊『西陣天狗筆記』に、「一　綴織　西陣北舟橋町井筒屋瀬平工也五十年前出来ル　瀬平後に会津公扶知人トナル」とあって、弘化２年以前の５０年前の寛政７年(1795)に林瀬平（井筒屋）が綴織を作ったことが記されている。また祇園祭の占出山町が所蔵する見送幕「牡丹鳳凰図　綴織」に関した古文書に「神具見送箱　寛政六年(1794)寅六月吉日綴縷織見送幕　一張　表花色地華鳥模様　裡上＊織唐模様子　下花色地無地　（添字）織工　西陣飛鳥井町　林瀬平」や、大津祭の龍門瀧山所蔵の見送幕「仙人図　綴織」に付いて町の古文書に「寛政四年(1792)子九月神事調物　覚　一金六十両　綴錦見送幕　京　林瀬平　代三貫四百九拾八匁　一百弐拾九匁　増銀　右同人　一

百四拾五匁　松屋久蔵　右瀬平綴錦誂方度々京登り相対披致し候ニ付挨拶として礼銀渡ス（略）」とあって、我が国の初期綴織と瀬平とに深い関わりがあるのが知れる。一点、珍しく西陣製でない綴織の幕があり、裏面に「文政十丁年亥年(1827)　會津若松住　渋井楮之吉　同忠五良　加藤平治　織之」とある。林瀬平は寛政８年(1896)１２月に会津候松平容頌の招きを受けて会津に下って移住しており、会津藩の殖産に従事して綴織を会津で始めたことも推される。このように瀬平は綴織製作の完成に深く関与した人物であり、綴織を瀬平綴錦と記されていたように綴織初期のものを瀬平織と呼んでいたことの想定も難くなく、「瀬平織」を聞き違えて「清平織」と記したのではないかとも考えられるのだが、憶測が過ぎるやもしれない。

4)参照

・本幕と同類の織物が存在するので紹介しておこう。

1,京都祇園祭山伏山・見送幕「飛龍波濤文様　綴織」

2,京都祇園祭霰天神山・後懸幕「紅地雲龍宝尽し文様　綴織」

3,京都祇園祭長刀鉾・見送幕「波濤雲龍文様　綴織」が見られる。

・３例共に幕の上部に瑞雲、中央に正面向きとその左右に龍を、そして下方に山岳に波濤の図を著した綴織物で、長刀鉾のものは瑞雲のさらに上に双龍文様の額絵が付いている。また山伏山のものは瑞雲と額絵の境で切断されたもののようであり、よく見ると霰天神山のものも上下の端部が切断されているようである。また山伏山が中国製、霰天神山と長刀鉾が日本製で、後者の方が図の表現は穏やかである。そして一般にこの種の図は下方に波濤と共に山岳を描くのが通例なのだが、山伏山と長刀鉾の幕は山岳に替えて太湖石の岩文様が描かれていて他に例を見ない描写である。鳩峯車の本幕もこのような太湖石の図が描かれており、図様も長刀鉾の図によく似ている。多分に長刀鉾と鳩峯車の幕の図は山伏山の中国製幕図に倣ってに我が国で製作されたものではないかと推測される。因みに長刀鉾町内文書の天保８年の条に「赤地五疋龍綴錦　見送り　海老庄箱代　右縁　猩々緋　弐百壱　裏地大廣白木綿　四丈四尺　四十三　白木綿　脇木綿　上色々　中入綿　仕立代」とあり、製作年も同時期なのが知れる。

Ⅱ）旧胴幕　左面幕　「唐人海岸談話図　綴織」　（１枚）

　　右面幕　「唐人洋邸遊苑図　綴織」　（１枚）

1)仕様について

a)伝承と経過（概要）

・本幕も古くから鳩峯車に伝わる幕で、昭和５９年に復元新調されるまで屋台に懸装して用いられてきた幕である。天保８年に各３０両で京都から購入（『春圃日記』）したものだと伝えられている。

・昭和３１年(1956)に幕の修理が行われる。

・昭和５８年度の事業として京都の川島織物で本幕を復元新調する形で新幕の製作が行われ、昭和５９年に完成。以降の祭には新幕を用いて本幕は旧幕として木箱に収納して保管する。

b)形態

・屋台の左右胴に懸装する横長の綴織幕２枚で、左面幕には海岸に集って談話する洋人図を、右面は岸辺の洋館で宴席を開いている洋人の様子を著しており、何処かの外国の図である。また左右の２枚の幕の図は繋げた図柄を描いていて、一つの物語を著しているようだが内容は不明。ただ２枚の幕の図柄が繋がるも、屋台の左面と右面に別けて懸けるために図の連結性は全く役立つっていない。鳩峯車が入手する以前にどのような意図で描かれ、どのように利用されていたのかの想像がつかない。古い綴織作品でこうした表現の類を見ない。

・こうした綴織を本紙にして幕を作るが、本幕は緋色羅紗裂による額縁部を設けず、左右面共に両脇に小壁を付けて屋台の胴部に懸装する。

・本幕は昭和５９年の胴幕新調の際に川島織物で修理が行われ、２枚共に綴織に和紙の裏打補正が施されている。和紙の裏打作業時の接着用糊料によって織物の風合が硬化していると共に彩色に若干の色泣きを伴っている。

・裏面は白色無地の麻布を用い、幕の左右辺縁の上下の各２ヵ所に２本づつ紐を付けて懸装時の固定の用としている。

c)寸法

左面幕　…縦：１７５０㎜　×　横：１２６３㎜。

右面幕　…縦：１７７５㎜　×　横：１２５８㎜。

（附図２参照）

d)製作の仕様（素材、技法）

・幕表面

本紙　　…左面幕「唐人海岸談笑図　綴織」

右面幕「唐人洋邸遊苑図　綴織」

図様　…海岸にある洋邸の庭と海浜で集って談笑する洋人達を描く。

（左右２面で一つの図柄として、２枚の図は繋がって著されている）

加工　…綴織（平組織緯畝地・地絵緯交替・錦）

経糸…材：絹（白）、撚：Ｓ／２Ｚ、密度：　４２／曲寸。

緯糸…材：絹、　　撚：Ｚ／２Ｓ、密度：95～ 180／曲寸。

（色：紅：２、青：５、藍：２、白：１、紫：１、

赤茶：３、黄茶：３，焦茶：１、黄萌葱：３、

青萌葱：３、他）

：丸金糸、８掛、Ｚ撚、綿芯、密度：９６／曲寸。

・幕裏面

裏地　　…白色無地麻布

図様　…無地

寸法　…表面に同じ（付：「図２」参照）。

素材　…麻布

経糸　…材：麻、撚：Ｚ、　密度：７２／曲寸。
緯糸　…材：麻、撚：引揃、密度：４８／曲寸。
織幅　…３４５㎜以上の小巾織物。
加工　…小巾の麻布裂を６枚接ぎにし、ミシン縫合（再仕立時）で仕立てている。

2)考察

左面幕「洋人海岸談話図　綴織」、右面幕「洋人洋邸遊苑図　綴織」について

・洋人が洋邸庭と海岸で談話する２様２枚の図だが、２枚の図柄は繋げて著されており、２枚１組で一つの題材を表現して作られたものである。だが本屋台では左右面に別けて懸けるために図の連結性は効を奏していない。完成していた作品を購入した故ではないかと考えられる。図柄の題材を判じ得ないが、表現が和様であることや絹の綴織で経糸にＳ撚糸、緯糸がＺ撚糸で織られていることからも日本製なのが推される。欧州フランス・フランドール地方で１８世紀に製作されたゴブラン織によく見られる貴人遊苑の図を倣って我が国で製作された邦製綴織が考えられる。数点の類似作品が現存しており、参照欄に揚げて紹介しておく。

・本幕については昭和５９年に復元新調仕様で新幕が完成しており、その折にこの２枚の綴織の裏面に和紙の裏打補正が川島織物で行われているが、仕立直しの際に縁等の裂を新材に替えて行った様子は見られない。

3)備考（幕入手に関する文献等伝承について）

・本幕２枚は前述の前幕「雲龍波濤図　綴織」と共に天保８年(1837)に一括して京都から購入されたものと考えられ、入手の詳細については前幕の備考欄を参照されたい。

4)参照

・本幕と同類の綴織が存在するので紹介をしておこう。

1, 祇園祭黒主山・前懸幕「南蛮人五立像図　綴織」
2, 亀岡祭蛭子山・見送幕「蘭人図　綴織」
3, 亀岡祭高砂山・見送幕「異国人図　綴織」
4, 伊賀上野天神祭薙刀鉾・見送幕「蘭人嬉遊図　綴織」
5, 余呉ちゃわん祭中村組・見送幕「蘭人嬉遊図　綴織」
6, 高山祭恵比寿台・見送幕「樹下美人図　綴織」
7, 熊川宿白石神社旧祭礼下ノ町・見送幕「胡人雅話図　綴織」が見られる。

・熊川宿の見送幕「胡人雅話図　綴織」は未見のため除き、他の６点は数人が談話する南蛮人また蘭人を描いた図様であり、その表現形式も背後に風景と共に著すという同様な図が描かれている。ただ背景図が洋風と和風の違いを見るも、全体の構図は似ていて、色彩も同様な特徴がある。

・伊賀上野天神祭薙刀鉾・見送幕「蘭人嬉遊図　綴織」は蘭人が海岸で談笑する図で、本幕によく似ている。裏面の白色木綿布上縁に「此の物　天明三年九月　渡口百五十余年　明治三十に年十月十五日縫替裁縫ハ　六十五　永井又五郎」の墨書が見られ、江戸後期の天明３年

(1783)に幕が製作され、明治３２(1899)年に補修と仕立て直しが行われたのが解る。

・亀岡祭高砂山・見送幕「異国人図　綴織」の箱の表に「文政八乙酉歳　九月吉日　高砂山見送」、蓋裏「丁内口主　京都六之助時代　誉田屋両家　矢代庄兵衛　矢代庄五良」とあって、文政８年(1825)の製作が解るが、蛭子山見送幕「蘭人図　綴織」については記載がなく不明。

・祇園祭黒主山・前懸幕「南蛮人五立像図　綴織」、余呉町ちゃわん祭中村組・見送幕「蘭人嬉遊図　綴織」についても記録がなく製作年が不明。ただし伊賀上野天神祭薙刀鉾の見送幕と余呉ちゃわん祭中村組の見送幕は同攻防で製作されたと考えられる酷似した作品である。

Ⅲ）旧本懸用見送幕　「日月立人物図　毛綴織」　（１枚）

1)仕様について

a)伝承および歴史等

・本幕は祭礼時の巡行に用いる本見送幕として古くから伝えられてきた幕で、昭和６２年に新幕を復元新調（川島織物）するまで屋台に懸装して用いられた幕である。

・昭和３７年の屋台格納時に事故で幕裾部分に損傷が起こる。それを昭和４２年に高山の渡辺表具店で修理を行っている。修理後、美しく出来上ったことに大層喜んだと言い伝えがある。

b)形態

・幕は全体を大きな縦長の長方形で作り、その中央部に日月立人物図の綴織を本紙として、またその四辺に緋色羅紗地で囲んで額縁仕様の幕を仕立てている。額縁上辺の緋色羅紗地に２個の大型錺り金具を装着する穴跡と、下辺の緋色羅紗地にも１１個の小型錺り金具を装着する穴跡が見られる。また額縁上端の２ヵ所に懸装用の吊輪金具を装着している。

・本幕は昭和６２年の新幕新調の際に川島織物で修理が行われ、表面の日月立人物図綴織を和紙で裏打補正を、また永年に生じた欠損や損傷ヵ所に裂地の補填と修繕が施されている。なおこの裏打作業の際に接着用の糊料によって織物に風合の硬化が見られ、また全面に色泣きを生じて見られる。

・裏面は「天仙送子図」を称する中国吉祥図を染め著した更紗染木綿布を使って裏地とし、幕の仕立てをしている。裏面に表面の緋色羅紗地を僅かに返して細い額縁仕立てにしている。

c)寸法

外寸　…縦：２３３５㎜　×　横：１４１５㎜。

内寸　…縦：１７６０㎜　×　横：１１８０㎜。

（附：「図３」参照）

d)製作の仕様（素材と技法）

・幕表面

本紙　…「日月立人物図　綴錦」

図様　…異国風景に異国人が立つ図

加工　…綴織（平組織緯畝地・地絵緯交替・錦）

経糸…材：絹（白）、撚：Ｓ／２甘Ｚ、密度：４２／曲寸。

緯糸…材：獣毛類、　撚：Ｚ／２Ｓ、　密度：90～ 150／曲寸。

（青：２、紅：２、朱赤：３、灰：２、茶：２，他）

額縁　…緋色羅紗無地

素材　…毛織羅紗（平組織地起毛織物）

羅紗裂は表面の起毛が健在で、織物組織および織密度は調査不可。

近現代製織の羅紗織物。

・幕裏面

本紙　…「天仙送子図　更紗染」

図様　…女仙人と童子図を中央に、３重の額縁を著した図で染める。

寸法　…縦：１９８０㎜　×　横：１２２５㎜。

（詳細は別図参照）

素材　…木綿布

経糸　…材：木綿、撚：Ｓ、密度：４５／曲寸。

緯糸　…材：木綿、撚：Ｓ、密度：４５／曲寸。

織幅　…１２２５㎝以上の広巾織物。

加工　…摺型染更紗

・更紗染は広巾木綿地を用いて天仙送子図と呼ばれる図を中央に置き、それを３重のボーダーで囲んだ額縁絵を構成する。外辺の額に紗綾形文様を、中の額に花紋唐草が、内側の額に鋸歯紋を著し、多数枚の彫刻型紙を利用して摺型友禅で行う。

・摺型友禅の彩色顔料には藍臘および茶色濃淡のタンニン質染料のレーキを用いて行う。画中に角印および円印を著すも解読出来ず。

・染色の用いられた型は多数枚に及び、正確な枚数確認は困難。

2)考察

表面「異人図　綴錦」

・本幕本紙部の綴織は経糸に絹糸を用い、また緯糸に疏毛糸が用いられていて、他に類のない糸遣いの綴織作品である。一般に歴史を通じて日本製の綴錦は経緯糸共に絹糸を使用して織られ、また古代のコプト織や中世期以降のゴブラン織と呼ばれる西洋の綴織には経糸に麻糸、そして緯糸に毛糸を使って織られているのがいえ、絹糸と毛糸を交織した綴織は類を見ない。ただ、従来の研究で経緯糸共に毛糸で織られた風変りな西欧風図の一類が日本に存在しており、それらについて江戸後期の日本製ではないだかという近年の研究発表がある。しかしそれらを含めても、経糸に絹と毛糸の混用を１例を見る他にこのように経糸に絹糸、緯糸に毛糸を用いた作例を世界中で他に見ない。しかも本幕は西洋風の図様で著され、経緯糸共に毛糸で織られている作品の図様と表現が明らかに違っている。それらの類よりも、江戸後期に経緯糸共を絹糸で織られた日本製の西洋風図の綴織に似ているのがいえる。図様と素材、技法を併せて推すに、既存する西洋風図の綴織と比較してもどの分類にも属さないのがいえる。

・また経糸に用いられた絹糸の撚りを見ても、それがＳ撚（中国製の絹製綴織の殆どは経糸に

Ｚ撚を用いている）であることから、日本製の綴織の可能性が考えられる。また緯糸の毛糸は剛毛の外観が窺え、羊毛と呼ばれる毛糸と風合いが異なる。概して日本にない素材であって、またゴブラン織などの毛織物とも糸質が異なって見える。どちらかといえば朝鮮毛綴とに呼ばれている特殊な綴織作品の緯糸と似ているようだが、朝鮮毛綴の織物は経糸に木綿糸を用いていることに違いをみる。この朝鮮毛綴も一応は半島産といわれるものの確かな生産地をまだ確定できておらず、また本幕の図様は朝鮮毛綴の図様とも明らかに異なっていることも実際である。しかし染色された毛糸の色彩に日本の色調が見られず、緯糸に２色の糸で撚糸をした杢糸を多用している。

・さて、本幕の図様表現に注視すると、図は異国人を著した西洋風な図様ではあるが、既存の異国人や蘭人、蛮人図また異国風景を称する西洋風な図の織物とは一種異なった、それより日本的の独特の雰囲気があり、厳密には同様の図様と一概に断じ難い。また本幕図中には中国の果実の荔枝やまた西洋の一角獣といった図など日本製の綴織には見られない図柄が表現されている。この点も留意すべきだろう。

・また織技にあっても前面に織段や色斑の表現が随所に見られ、日本製の綴織にあまり見られない製作仕様だといえる。さらに日本製の綴織の技法としてあまり用いられない流し織技法が図中全体にわたって多用されている。一般的に中国製の綴織や朝鮮毛綴れと呼ばれる類にはこの流し織技法が多用されているのがいえる。こうした点からも本幕を我が国製と謳うにはいささかの躊躇もある。産地不明としておくのが賢明かもしれない。ただ近年の研究で、江戸後期の日本でゴブラン織作品を模した毛織綴の製作が行われていたという発表（後述）もあり、今後の研究を待たねばならない。゛

・本幕の額縁として四辺の具留利に付く緋色羅紗地は、その状態からして古い時代の材とはいえない程の健常な外観が持っており、また羅紗地に錺り金具装着の穴跡が見られることからも昭和６２年の川島織物による修理時以前から用いられていた羅紗地なのがいえる。多分に『昭和八年癸酉起　歳々勘定記』の昭和３１年条の「一　五萬四阡円也　屋台幕修理」、また昭和３２年条の「一　弐萬五阡円見送り修理　飯山支拂」のいずれかが金額から推してそうだと思われる。

・また昭和４２年には、昭和３７年の屋台格納時の事故で幕裾部分に損傷が起こたヵ所について、それを昭和４２年に高山の渡辺表具店で修理を行っている。さらに図中に見られる欠損部の補填と損傷部の修理については昭和６２年に川島織物でも追加されているようである。

・参考に、経緯糸共に毛糸を使って織った本幕と図様がよく似る西洋風図の綴織作品の類例を揚げると、長浜曳山祭・寿山の「西洋古事図綴織　見送幕」、同じく長浜曳山祭・萬歳樓の「西洋古事図綴織　見送幕」、祇園祭・油天神山の「西洋古事図綴織　見送幕」、祇園祭芦刈山の「西洋古事図綴織　見送幕」、大津祭石橋山の「西洋古事図綴織　見送幕」などが見られるが、全ては１７世紀から１８世紀にかけて西洋で作られた作品の図と技法を模して、１９世紀始めの日本で輸入毛糸を用いて製作されたものなのを梶谷宣子氏の研究で解っている。ただし大津祭石橋山と祇園祭芦刈山のの者は元は１枚の作品で１７世紀初め頃の作とされ、また祇園祭油天神山の作品には経糸に毛と絹を混ぜて撚糸をした糸が用いられていて、絹と毛の両者を用いていることの類似が見られるが、１７世紀以降のゴブラン織には緯糸に

毛糸以外に若干の絹糸を用いる例が少なくない。

・とくに祇園祭・油天神山の作には文化１２年(1815)新調の記録と、文化１１～１２年藤田貞榮（役行者山町住）の『増補祇園御霊会細記』の牛天神山（油天神山）の項に、「錺附…文化十二歳乙亥六月新調　見送　地織縷錦もやう人物」と、また凡例に「一、山鉾錺付之部に水引見送前掛等に地織と記せしは近世京師にて織出すところ綴錦なり　文化九歳壬申六月吉辰　藤田貞榮誌之」とあり、こうした毛織の綴織幕が京で作られていたろうことが推される。またこの幕と全くほぼ同図の裏返し図で織ったのが長浜祭萬歳樓の幕で、幕箱の蓋裏に「文化八乙酉(1825)九月造之」の墨書銘があり、同時期の製作が解る。また長浜祭寿山の幕箱蓋裏には「文政甲申七年(1824)九月大手町組」を見る。さらに大津祭石橋山の幕に「新調年天保三年(1832)」の墨書が見られる。

・次に絹織による西洋風図の綴織を揚げるならば、祇園祭・黒主山の「蛮人図綴錦　前懸幕」、亀岡祭・蛭子山の「蘭人図綴織　見送幕」、亀岡祭・高砂山の「異国人図綴織　見送幕」、上野天神祭・薙刀鉾の「西洋人図綴織　見送幕」、長浜市余呉町上丹入茶碗祭の「西洋人図綴織　見送幕」等が見られる。高山祭鳩峯車の幕はこれらの図の雰囲気に近い表現だが、やはり少し趣を異にしている。

・ところで絹製西洋人図綴織の上野天神祭薙刀鉾の幕と長浜市余呉町上丹入の茶碗祭の幕を見ると、両者はほぼ同じ図で著されて酷似している。おそらく同時期の同工房で製作された作品ではないかと推され、上野天神祭薙刀鉾の幕には裏面に木綿布を貼付して、そこに「此の物　天明三年(1783)九月　渡＊百五十年余　明治三十二年(1899)十月十五日縫替　裁縫ハ六十五　永井また五郎」の墨書があり、伝承だが天明三年(1783)の製作伝えられる。またこの上野天神祭薙刀鉾の幕の裏裂にはフランス・ジュイ製の西洋人物図の洋更紗が用いられており、高山祭鳩峯車の見送幕の裏地に長崎更紗また堺更紗と呼ばれる異国風の図の裏地を利用しているのに同じで、最初は無地裂を使っていた幕の裏裂についてもこの頃の幕から大きな変化が見られだしている。このように１８世紀後半頃に舶載裂など貴重な模様のある裂地が幕の裏地に採用する流行が見られるのがいえ、こうした幕の表裏共に異国風を用いた裂の利用があったことから推しても、西洋文化に対する強い関心を全国的に民衆が持ち出したのが理解できる。１８世紀になって陶磁器や漆工芸の世界で西洋風の図柄が流行したといわれる以前に、その前駆として祭礼幕の表現に見るのは興味あることではないか。

裏面「女仙人図　更紗染」

・裏面には「天仙送子図　更紗染」の木綿布が使われている。天仙送子図とは中国百唐子図や麒麟送子図と同様に天から良い子孫が授かるという願いを著した中国の道教を元とした吉祥図であり、本裂も蘇州版画に見られる図をそのまま模写して摺型技法で行われている。

・元より更紗染は外来の印捺技法による模様染のことであって、輸入をしていた貿易港の地名を冠して長崎更紗や堺更紗と呼ばれていたものが、次第にそうした異国風の模様染が内地でも行われるようになり、それをも含めて更紗と呼ぶようになっていった。それら我が国製のものを和更紗と呼んでいたのではあるが、異国風を喜ぶ気風に従って京都や柳川などの他所で製作された異国風の和更紗が堺更紗や長崎更紗を称して持て囃されて混乱することになる。

・染織製作の主産地の京都においても同様の染色は古くから行われていたのであり、京更紗は天保期に流行したことから天保更紗とも呼ばれていた。また京都は染色業と技法の中心地でもあって、舶来更紗の偽作が上手に行われて異国更紗に見紛うものが作られていた。こうしたことから両者が混同して見分けることもなくなっていったのがいえる。
・このように本更紗も堺更紗や那賀作更紗、和更紗などと称され、その産地と製法を詳らかにしていない。ただ本図は中国清時代風の女人と唐子が描かれていて、原図は南中国の蘇州版画「天仙送子図」をそのまま模して著しているのがいえ、また図中に用いられている青の色調が日本の赤味のある色ではなく、黄味の冴えた南方の青色なのも特徴にある。一概に日本以外の製作を否定できない。さらに使用されている木綿布の生地巾も極めて広く江戸期の日本ではまだ製作されていなかったのも実際である。
・本更紗の同品が堺市博物館に所蔵されていて、それは堺更紗だとされており、また 1993 年刊行の池長孟著の『邦彩蛮花大宝鑑』にも同柄の更紗を載せて堺更紗と記している。今も巷に見かけることもあり、繊細な表現技術は当時の中国製更紗よりは日本的だといえようが、研究が行き届かず言明できない。また本図柄の更紗は婚礼用蒲団の鏡地として好まれたといわれるが、宝相華唐草を著した堺更紗や天保更紗に蒲団鏡の例としてよく見るも、本図のような例を多く見ることはない。一般に日本の婚礼用蒲団地の鏡は蓬莱信仰に基づいた模様が見るのが殆どで、中国的な信仰の図柄が用いられて日本の婚礼道具として馴染んでいるようには思われない。『従明治二十三年庚寅九月　至明治廿八年九月　歳々勘定記』の「明治二十四年　廿八銭　蒲団浦壱枚」とあるのを本裂と見る向きもあるが、製作年代として少し下り過ぎるようである。さらに我が国で広幅の木綿織物が製作できるようになったのは近代になる頃のことで、木綿の撚糸技術がまだ発達していなかった我が国で本裂のような広幅木綿が織られて流通していたのは考えられない。よって本裂の生地、図様表現および染色加工の技法から推して日本製ではないのだうと思われるが、本更紗の発展等の詳細については今後の研究を待ちたい。

3)備考（幕入手に関する古文書について）

・『春圃日記』に旧前掛幕「雲龍波濤図　綴織」と左右２枚の旧胴掛幕「唐人遊苑図　綴織」が天保６年に入手したことが記されており、それに続く天保９年(1838)の条には「六月二十五日　当組屋臺見送り幕先達より加が屋又吉上京の節相尋ね候処唐物毛織綴り一枚代金弐拾六両図柄の手本来り候へ共代物は見せ申さず趣（中略）新町中西上京に付代金弐拾六両持たせ差遣はし候云々」とあり、天保９年６月に又吉が上京の折に唐物毛織綴を２６両で購入の商談するも、図様が届いても幕が届かなかったので、新町の中西が上京する際に２６両を持たせて支払ったことを記している。そしてこの文中の「毛織綴り」という用語はまだ当時は一般的な言葉ではなく、西欧製のゴブラン織などの毛糸を使った特定の織物を指して使ったのであり、中国や邦製の絹綴織に対して用いられた言葉ではないことから、この文面にある幕は現在も遺えられている旧見送幕「日月人物図　毛綴織」を指していたことの想定ができる。そこからも旧本懸け用見送幕「日月人物図　毛綴織」は天保９年に購入されて幕に仕立てられたものだと考えられる。天保６年から９年にかけて当初念願の３種４枚の幕が揃えら

れたことになる。

Ⅳ)旧替懸用見送幕　「高士遊苑図　綴織」（１枚）

1)仕様について

a)伝承および歴史等

・本幕は古くから祭礼の巡行に用いる替見送幕として伝えられてきた幕で、平成４年(1992)に新幕を復元新調（川島織物）するまで利用してきた幕である。

・本幕は綴織技法を用いて製作されており、幕面上辺に全画面の約１／４ほどを占めて番の鳳凰を織って額部分を設け、その下方の主画面に仙人達が談笑している仙人遊苑図を著している。一般に中国の高士の邸宅内に吉祥を寿いで壁面に飾る幕類であり、そうした壁装織物が我が国に舶載されて祭礼用などの幕に供されていたのがいえ、本幕はさらにそれらを模して日本で製作された織物だといえる。本幕の製作仕様から推して江戸期に西陣で製作された作品だと考えられるが、新調また購入、採用時期などに関しては町ではその詳細な経緯を伝承していない。

b)形態

・縦長の長方形に構成して大きな幕を作り、表面中央に八仙人と思われる高士が庭苑を遊覧する図を、また高士の図の上側に番いの鳳凰図を織りだして上辺額部分を設けている。こうした織物を幕の本紙として、その四辺周囲を緋色羅砂裂で囲んで額縁仕様に仕立てている。額縁上辺の緋色羅紗地に２個の大型錺り金具を装着する穴と、下辺の緋色羅紗地にも１１個の小型錺り金具を装着する穴が開けられており、穴には飾金具をつけてそこから飾り房を垂れて用いられる。また幕上辺の端に２ヵ所の懸装用の吊輪金具が装着されている。裏地には菊華蜀江文様の近代製木綿捺染更紗が用いて２枚接ぎで裏面を作っている。

・本幕の復元新調事業として平成４年(1992)に新幕を製作する折、川島織物で本幕の修理が行われ、表面の本紙部分の綴織を和紙によって裏打補正を、また永年に生じた綴織部の欠失部や損傷部分に繍技による部分繕いと裂地の補填の修理が行われている。修理は精緻に行われているが、裏打作業に用いた糊料によって織物風合の硬化が見られると共に、糊量による経糸の汚染が見られる。

c)寸法

外寸　…縦：２４１２㎜　×　横：１４４０㎜。

内寸　…縦：２０９０㎜　×　横：１２７５㎜。

（附：「図４」参照）

d)製作の仕様（素材、技法）

・幕表面

本紙　…「高士遊苑図　綴錦」

図様　…庭苑で嬉遊する仙人の図

加工　…綴織（平組織緯畝地・地絵緯交替・錦）

経糸…材：絹（白糸）、撚：Ｓ／２Ｚ、密度：　４０／曲寸。
緯糸…材：絹（色糸）、撚：Ｚ／２Ｓ、密度：１１０／曲寸。
（青：５、紅：３、萌葱：５、黄茶：４、赤茶：３、
黒、白、灰、他）
金糸：丸金糸、下地：透漆、芯糸：木綿、
密度：１１０／曲寸。

額縁　…緋色羅紗無地
素材　…毛織羅紗（平組織地起毛織物）
羅紗裂は表面の起毛が健在で、織物組織および織密度の調査不可。
羅紗地は現代の製織織物。

・幕裏面
本紙　…「菊華蜀江文様　木綿捺染更紗」
図様　…菊図を使った蜀江文様の図柄。
寸法　…縦：２４１２㎜　×　横：１４４０㎜。
（詳細は別図参照）
素材　…木綿布
経糸　…材：木綿、撚：Ｚ、密度：未調査／曲寸。
緯糸　…材：木綿、撚：Ｚ、密度：未調査／曲寸。
織幅　…６９０㎝以上の広巾織物。
加工　…色糊捺染型染
型枚数…
型送り…１８㎝
型巾　…１９㎝
・更紗染は広巾木綿地を用い、菊花を題材に蜀江文様を構成した図柄を、色糊を用いる型染捺染で行っている。生地を縦方向に２枚接ぎで仕立てている。
・彩色は糊料に化学染料を混じて、蒸熱によって染着する捺染（写し糊友禅）技法が用いられ、明治後半から大正頃にかけて製作された近代の作品である。

2)考察
表面「高士遊苑図　綴織」について
・前述のように本幕の本紙部である高士遊苑図の綴織は、柔らかな図柄表現と用材、さらに経緯糸の撚糸方向からみても間違いなく日本製だといえ、中国清時代前期頃に製作された綴織作品を模して製作されたと思われる。図柄に簡潔な線描表現を用い、空間を活かした構図と白色を多用して多彩で明るい色調からして１９世紀前半期早期の製作が考えられる。
・また随所に見られる黒糸および褐色糸部の損傷については、糸の染色時にタンニン色料を鉄イオンを使って発色をさせたことにより、生地の繊維ミセルに残留した余剰鉄分が錆化して繊維を痛めたものであり、主に江戸期以前のタンニン鉄による黒色および褐色部分によく見られる現象といえる。これら修理部分の一部に補彩も見られる。

・幕の右下部に表裏を通した裂傷部分が見られるが、これは明治２６年の火事による事故跡だろうか。裂を補填して丁寧な修理が施されている。
・町に遺る古文書の中に本幕に関する記載が全く見られず、幕入手の子細は不明である。しかし本幕は旧本見送幕の替用見送幕として伝承されてきていることから、旧の本見送幕が調整されたとする天保９年(1838)以降の入手、もしくは旧の本見送幕以前にあったものが新幕の登場で替幕用として用いられるようになったかの双方が推されるが、町の古文書『享和元年(1801)辛酉十月日　幕翠簾出来并奉加取立覚　大津絵組　九軒扣』から、天保８年(1837)以前にあったのは白羅紗地に雲龍文様金糸刺繍の胴幕であり、その時に見送幕を懸けていなかったように推されるのであって、旧替見送幕が天保８年以前に購入されたとは考えがたい。
・また本紙の周囲に付く緋羅紗地は本紙の綴織が製作された時代のものでなく近代の製品と考えられ、修理の状況から見ても修理の時に入手した幕とも考え難く、縁の緋羅紗は本紙部の修理に際して取り替えられたものだと思える。よって本幕の入手については、旧本見送幕を入手した天保９年以降で、明治２６年の火事で幕が罹災する迄のことだと考えられるが、余りにも大概な表現なのを否めない。

裏面「菊華蜀江文様　木綿捺染更紗」について
・裏地裂は木綿糸の材質と製織仕様から、また本裂は捺染文様、色料、加工技法などか案じて明治後半期から大正年代に製作された型捺染技法による製品だと考えられ。旧本見送幕の裏地更紗同様に本裂を町の古文書『従明治二十三年庚寅九月　至明治廿八年九月　歳々勘定記』の「明治二十四年　廿八銭　蒲団浦壱枚」とあるのを本裂と見ることも年代的に可能だが断言をできない。

3)備考
・裏地に２ヵ所の焼け跡を見るが、明治２６年にあった町焼けの際に個人宅に預りとなっていたことから本幕も被害に遭ったらしい。町所蔵の『昭和八年癸酉起歳々勘定記』の昭和３１年の条に「一　五萬四阡円也　屋台幕修理」および昭３２年に「一　弐萬四阡円　見送り修理　飯山支拂」とあり、この時期には本見送幕と替見送幕の両方の修理が行われているようであり、いずれかが本幕の修理だと考えられる。
・なお、昭和６３年刊行『八幡祭と屋台』と昭和５６年刊行『高山祭屋台雑考』に、替見送幕である本幕が天保８年に５０両（後者）また２６両（前者）で購入されたとあるが、これは毛綴織と絹綴織の別を考慮せずに文献上の年記順に従ったためだろう。

Ⅴ）旧水引幕（前・後）　　「緋羅紗地吉祥花文様　刺繍」（２枚）
　　（左・右）　　「緋羅紗地吉祥花文様　刺繍」（２枚）
旧小壁（後・右・左）「緋羅紗地吉祥花蝙蝠文様　刺繍」（６枚）
　　（前）　　「緋羅紗地吉祥花蝙蝠文様　刺繍」（１枚１式）

1)仕様について

a)伝承および歴史等

・本幕も昭和５６年に復元新調が行われ、それまで利用していた本幕と交替して新幕が用いられることとなり、旧幕類として保管されている。

b)形態

・水引幕は屋台上階の床に設けられている高欄下の下階上方の四方に懸けられる幕で、前後の短い幕と左右の長い幕の４枚があり、各幕は木製薄板の貼付して作られている。懸装ではこの板幕を懸けて飾られる。また小壁は２形式が見られ、一つは門構え形に組まれた木製薄板に幕を貼付した変形の幕１枚であって、幕を懸けない後面の四本柱内側に付けられる。他は前幕の両袖として２枚が、また左右面胴幕の両袖として各２枚の４枚の都合６枚がある。共に細長い矩形の幕で木製薄板に幕を貼付している。

c)寸法

水引幕（前後高欄下に２枚）

外寸　…縦：　３８０㎜　×　横：２８００㎜。

水引幕（左右高欄下に２枚）

外寸　…縦：　３８０㎜　×　横：１８６５㎜。

小壁（後面…門構え形）

外寸　…縦：１２７０㎜　×　横：１４１５㎜。

小壁（前幕および左右胴幕の両袖の６枚）

外寸　…縦：　２６０㎜　×　横：１２８０㎜。

（附：「図５」参照）

d)製作の仕様（素材、技法）

・幕表面

本紙　…水引幕「緋羅紗地吉祥花文様　刺繍」

小壁「緋羅紗地吉祥花蝙蝠文様　刺繍」

図様　…牡丹、菊などの吉祥花と蝙蝠の文様

生地　…緋羅紗地…綾組織毛織物（経２枚緯２枚綾組織、起毛加工）

経：毛、Ｚ撚、１４／cm

緯：毛、Ｓ撚、１４／cm

加工　…刺繍（直繍い技法）

繍技　…平縫い（繍切り）、纏縫い。

繍糸　…材：絹（白、水浅葱、浅葱、縹）、撚：無撚（釜糸）。

縁裂　…「小花唐草文様　緞子」

図様　…小花唐草文様

織技　…経５枚繻子地・緯繻子地・紋綾。

経：絹・青紫、Ｚ撚、８３／cm

緯：絹・白、　引揃、３２／cm

紋丈：９７㎜、紋釜：採寸不可。

裏面　　…木製板（材質未調査）。

2)考察

水引幕表面「緋羅紗地吉祥花文様刺繍」

小壁表面「緋羅紗地吉祥花蝙蝠文様刺繍」

・水引幕および小壁の各幕共に緋色羅紗地に牡丹や菊、小花、蝶、蝙蝠などの吉祥文様を散らして刺繍をしているが、各幕面に文様が正確に配置されている様子はなく、また模様配置に偏りがあったり、図が切断されて表現している箇所も見られる。そのことは各幕毎に図案が調整さて後に刺繍加工をしたのではなく、大きな布に模様を散らして刺繍したものをそれぞれの幕の大きさに裁断して仕立てているからだと思われる。また図の題材や表現、材料、繍技、色彩をよく見ると我が国風の表現ではなく、中国的な表現と刺繍技法が見られることからも渡来品ではないかと考えられる。とくに色彩と繍技の仕様からは清朝後末期頃の製作が推され、日本の幕末期から明治中頃までの舶載が考えられるが、断言はできない。昭和１６年刊行『八幡祭と屋台』に「明治二十七年　水幕新調（曳行時および蔵入時に使用）」とあるが、出典が詳らかでない。

・また本幕の緋羅紗裂は綾組織の毛織物で、やや薄手で粗い漢字の生地であることから羅背板や小羅紗と呼ばれることもあったらしいが、緋色のものは総称して緋羅紗と呼ばれることも多かった。経年の使用で生地が柔らかく薄くなった羅紗地をどのように判別して呼称するのかは難しいといえよう。

3)備考

・本幕についても伝承がなく詳細を伝えられていない。組に伝わる古文書『明治二十三年庚寅九月　至明治廿八年九月　歳々勘定記』によると、「明治廿四年八月三十一日以下　屋台主前支拂記　一　八円五拾弐銭　口アカキ幕直し　手間代　但糸代共」とあり、アカキ幕とは本幕のことかと思われ、明治期に修理があったろうことが知れる。

◆春祭「鳳凰台」（日枝神社例祭＜山王祭＞）所蔵の旧用幕類の調査。

・「鳳凰台」所蔵の旧幕調査において実施した幕は下記の２幕である。

Ⅰ）旧胴幕　「縹色地雨龍文様　刺繍」（一枚物の大型幕）（１枚）

Ⅱ）天井幕　「宝相花唐草文様　更紗染」（現用の幕）（１枚）

・鳳凰台の創建は未詳だが、当初に屋台で用いたからくり人形の大黒天が寛政１１年(1799)に川原町上組の松樹台（大国台）に譲渡された記録があり、寛政期以前に屋台が存在したのは確かといえる。其の後の山王祭礼触書の『文化三年(1806)山王祭礼屋台順』に「鹿島踊　米谷次（治）八郎組」としており、鹿島踊の台名であったのも解る。

・しかし、組の『文政治五年(1808)ヨリ天保十亥年(1839)三月迄十八ヶ年　山王一条　祭礼方諸事留』によると文政５年以後は鳳凰台となっている。

・さらに、文化４年(1807)３月に『芦生　藤瀬屋喜兵衛組』とあって、当時の台名を芦生とする説があるも、高山屋台保存会刊行『高山祭屋台とその沿革』記載の「芦生」は五台山の旧名だとされており、こうした誤解は昭和２５年刊『飛騨まつりの屋台』および２６年刊『鳳凰臺沿　革史』の記述に元があるようだと指摘している。
・文政８年(1825)には新造屋台の計画が成っている。
・文政１０年(1827)３月に「人形　鹿島事触　下段幕　花色羅紗雨龍錦」が見られる。、
・また『文政五午年ヨリ　天保十亥年三月迄十八ヶ年　山王一条　祭禮方　諸事留』の文政十一子年(1828)三月の条に「一　上段幕　ゑぞにしき　同水引幕　萌黄古金襴　下段幕　花色羅紗雨龍縑　同水引幕　猩々緋蜀江繋　人形鹿島事触　（略)」とあり、初代鳳凰台に懸装されていた幕類の詳細を知れる。
（以上の記事は『文政五午年ヨリ　天保十亥年三月迄十八ヶ年　山王一条　祭禮方　諸事留』による)。
・文政１２年(1829)８月１７日に欅の台輪を５両で購入する。
・文政１２年１０月２８日に、屋台車を１両３分で買い入れる。
・天保２年５月朔に中段の大幕（胴幕）として３色の天連布（テレフ・紋天鵞絨）を５０両１朱で買い入れる。赤色と黄色の天連布を大阪で、紫色の天連布を名古屋で買い入れる。(翌年に新しくできる新造屋台用の幕としてではないだろうか)。
・天保３年(1832)正月晦日、二代目鳳凰台の斧初めを行う。
・天保３年(1832)１１月２日、夜四ツ時に弐之町弐町目福嶋屋清右衛門より出火した。『祭禮方諸事留』に、「十一月二日夜四ツ時弐之町弐丁目福島屋より出火高山三町竈六百軒余類焼　よく三日四ツ　時鎮火候也　右ニ付当組古屋台ハ不及申此度新造屋台も過半焼失致誠ニ町内一統残念千万ト語居申儀也」とある。屋台の構造物以外は各屋に別けて格納していたため全部を焼く事なく、天保５年(1834)９月１０日条に焼残部材として棟柱４本、台輪、古屋台鳳凰、麒麟８匹、牡丹花などが記される。(昭和５６年長倉三朗刊『高山祭屋台雑考』にはこの時に「焼失を免れたのは青羅紗で金糸で雨龍五匹を刺繍した旧幕、雲龍寺に寄贈されて座敷の欄間に使われている朱塗りの組勾欄、中段の欄間の極彩色破れ蜀江文すかし、裏は緋羅紗張り＜この緋羅紗は蜀江文の跡あり、昭和三十七年の修理にその一部を下段後面に使用した＞であった。」と記されている)。
・天保６年(1835)５月２５日に、三代鳳凰台（現鳳凰台）の「斧始」をする。
・屋台は焼失後直ちに再建に着手して同６年に完成したのが現在の屋台である。前記の『祭礼方諸事留』に「未　三月七日　当年屋台出来仕候趣　村瀬屋と亀屋　参相届候也」とある。現在の三代目屋台に二代目屋台用として購入された天連布の中幕が利用されていることから、二代目屋台と三代目屋台の製作年が極めて近いことを含めて、二代目屋台に倣って三代目屋台が新造されたものだと推される。
・天保７年(1836)３月６，７日、見送幕縁付作業をする。見送幕は古渡りの薔薇模様の段通で仕立てたもの。見送幕は１９世紀イギリス製の薔薇文様の輪奈織毛織段通で仕立てる。
・天保７年の日枝神社祭礼に新造屋台を曳行し、始めて屋台に見送幕を取り付ける。
（ここまでの記事は『文政五午年ヨリ　天保十亥年三月迄十八ヶ年　山王一条　祭禮方　諸事留』による)。

・昭和１０年(1935)、装飾品（幕類は行われていない様子）を主体に修理をする。費用１０３９円。
・昭和４２年(1967)、青地唐錦天幕、中段簾房、銀鉾など。総額４０万円。
・昭和５６年(1981)、明治年間に購入した鶴文様の敷物を見送幕として新調する。５６年５月２日に完成。(鶴文様朝鮮毛綴見送幕)
・平成３０年(2018)３月に祭の準備をしている際に、日枝鳳凰台の屋台蔵から一枚の幕が発見された。そしてその幕は文化８～９年頃に描かれたろう『高山祭屋台絵巻』に著されている「鹿嶋踊　二ノ町下組（初代鳳凰台）」の図に懸かる大幕（胴幕）ではないだろうかと推察され、翌平成３１年(2019)度の祭礼が終わった４月１６日に現屋台に懸けられて、２００年前の屋台姿を見て喜んだという。
・さて、現在の鳳凰台の幕類懸装については、中段に縦縞に小花唐草文様の赤、黄、紫色、そして丸紋格子文様の黒色のエンボシング天鵞絨を縦島に並べた幕を屋台の四辺を包むように懸けている。また幕の上方に簾を藩撒きにして垂らすが、簾の裏面には緋羅紗が貼られ、蜀江繋ぎの文様の跡型が見られる。上段に天井に青地唐錦の天幕を絞って貼る。そして屋台の後面には１９世紀イギリス製の薔薇文様の輪奈織毛織段通で仕立てた見送幕を懸ける。見送幕は本幕の他に替幕として平成５６年に仕立てられた鶴文様朝鮮毛綴の見送幕がある。

Ⅰ）旧胴幕　「縹色地雨龍文様　刺繍」（一枚物の大型幕）（１枚）

1)仕様について

a)伝承および歴史等

・本幕は平成３０年に高山祭の春祭の際に日枝鳳凰台の屋台蔵から発見された古い幕である。縹色の毛織物に金糸で龍が刺繍されており、文化８～９年頃に描かれたとする『高山祭屋台絵巻』に見られる鳳凰台に懸かる胴幕と同色同図柄であり、当時の幕ではないかと考えられている。組では今後に本幕を調査すると共に、現屋台に懸装が可能かも調査し、幕および屋台の骨格などの経緯についても検証していく予定としている。
・仮に本幕を文化８～９年頃に描かれた『高山祭屋台絵巻』に見られる鳳凰台の幕だとすると、前記の『文政五午年ヨリ　天保十亥年三月迄十八ヶ年　山王一条　祭禮方　諸事留』の文政十一子年(1828)三月の条に「一　上段幕　ゑぞにしき同水引幕　萌黄古金襴　下段幕　花色羅紗雨龍繍　同水引幕　猩々緋蜀江繋　人形鹿島事触　（略）」とある初代鳳凰台の大幕にあて嵌めて考えられる。

b)形態

・本幕は初代鳳凰台で屋台中段胴部の四方に曳き廻して懸装されたのではないかと考えられている一枚物の幕で、丈が約４．５尺（曲尺）、横に約２，７丈（曲尺）もある長大な幕である。幕表面の外観としては額縁や一文字部分を設けず、幕面に縹色羅紗地（羅背板）を用いてそこに１０頭の雨龍文様の金糸刺繍を施している。上辺端に懸装のための乳裂を付け、また裏面は裏地裂を付けるも上方の１／４部分を残して下方が切り取っていて、表面の龍の刺繍裏を殆ど露出している。ただし左右両端部に別の裏地が用いているのが見られ、明らか

に原形から改変されているのが知れる。

c)寸法

縦：１３４３㎜　×　横：８２３０㎜

（附：「図６」参照）

d)製作の仕様（素材、技法）

・幕表面

本紙　…「縹色羅紗地雨龍文様　刺繍」

図様　…幕の前面に２頭、左右面に書く３頭、後面に２頭の雨龍文様を幕の上方で遊泳する如く著している。

生地　…縹色羅紗地…綾組織毛織物（経２枚緯２枚綾組織、布面起毛処理）

経：毛、Ｚ撚、１２／㎝。

緯：毛、Ｓ撚、１２／㎝。

加工　…刺繍

縹色羅紗地に雨龍文様１０頭を刺繍技法で著している。

雨龍頭部は切付繍い、胴および足部は直繍いをする。

頭、背

繍技　…切付繍い…金糸駒遣い繍（両駒仕様、綴じ縫い）。

繍糸　…材：丸金糸、本金１号～４号色、１２～１４掛。

綴糸　…絹、朱色・萌葱色。

目（黒目は漆描き）切付繍い部分

繍技　…目の周囲：朱絹糸オランダ巻

眼球：手吹ガラス（鉛ガラス？）を嵌める。

鰭（頭、足、背）

繍技　…直繍い…金糸駒遣い繍（両駒仕様、綴じ縫い）。

繍糸　…材：丸金糸、本金仲色、１２～１４掛。

綴糸　…絹、萌葱色。

髭

繍技　…直繍い…金糸駒遣い繍（片駒仕様、綴じ縫い）。

繍糸　…材：撚金糸、本金、１号～４号色、１２掛。

綴糸　…絹、黄色。

腹

繍技　…直繍い…唐撚糸駒遣い繍（両駒仕様、綴じ縫い）。

繍糸　…材：絹糸、白色、唐撚糸。

綴糸　…絹、白色。

＊蛇腹に朱顔料による彩色を見る。

火炎

繍技　…直繍い…唐撚糸駒遣い繍（両駒仕様、綴じ縫い）。

繍糸　…材：絹糸、濃朱色、唐撚糸。

綴糸　…絹、朱色。

爪

繍技　…直繍い…諸糸駒遣い繍。

繍糸　…材：絹糸、白色、Ｚ／２Ｓ甘。

綴糸　…絹、朱色。

裏地(1)…「薄茶地無地　木綿布」（左右両端部を除いた半量）

図様　…薄茶地無地（柿渋染？）

織技　…平織（平組織）。

経糸：綿・薄茶（後染・繊度斑大）、Ｓ撚、密度：１８／cm。

緯糸：綿・薄茶（後染・繊度斑大）、Ｓ撚、密度：１６／cm。

織巾：３３．５mm。

裏地(2)…「薄茶地無地　木綿布」（左右両端部を除いた半量）

図様　…薄茶地無地（雑木染？）

織技　…平織（平組織）。

経糸：綿・薄茶（後染）、Ｓ撚、密度：１８／cm。

緯糸：綿・薄茶（後染）、Ｓ撚、密度：１４／cm。

織巾：３３．５mm。

紐　　…「緋地縮緬」（幕の左右両端に付くが、後付けの可能性あり）

図様　…緋色無地（蘇芳染）

織技　…平織縮緬（二越縮緬）。

経糸：絹・赤茶（後染）、Ｓ撚、　　密度：７０／cm。

緯糸：絹・赤茶（後染）、Ｓ撚・Ｚ撚、密度：３５／cm。

織巾：不明。

裏地端布…「宝相花唐草文様　更紗」（左右両端部分の２ヵ所）

生地　…平織木綿。

経糸：木綿、Ｓ撚、密度：１７～１８／cm。

緯糸：木綿、Ｓ撚、密度：１４～１６／cm。

織巾：不明。

染技　…摺型友禅（合羽摺）

線描：カチン、赤：弁柄、青：藍臘、

＊参考…本品と同裂（「宝相花唐草文様更紗」）が現屋台の天井板貼付裂に、裁断片７裂を貼り合わて用いられている。断片であることと退色の具合から胴幕両端裂の再利用が考えられる。

2)考察

幕表面「縹色羅紗地雨龍文様　刺繍」

・本幕の表面「縹色羅紗地雨龍文様の刺繍」に用いられている生地は、平組織の毛織物を起毛させた羅紗と呼ばれる織物だが、本品はそれよりやや薄手の羅紗であると共に２／２綾組織

地で織られた羅紗であって、一般に羅背板と呼ばれた織物ではないかと思われる。本品は織地風が粗野であるのに加えて生地の織耳に１本の細縞筋を持つなどの特徴があることから江戸時代後期頃の舶載品だと推される。これら羅紗の生産地については、緋羅紗の染色に特定な地域で産する染料（ポルメッシュ・ラック）が用いられていることから東欧のポーランドあたりとする説が、また起毛のない呉呂服倫などの毛織物を織りだした英国産の説、さらに羅背板のような２／２綾地織物の発祥がインドのカシミヤ織であるなどの諸説があり、実際の産地は不明だといわざるを得ない。

・幕表面は縹色羅背板の５裂を縫合して、全長８２３㎝の幕を構成してつくっている。その中央部で１９０㎝の裂地を挟んで左右に２６０㎝と２９２㎝の裂を繋ぎ、また左右両端に４９㎝と３２㎝という短かい裂を繋ぎ合わせている。高さは１３０㎝で、幕面の中央部に２頭の龍を水平に置き、左右面には各３頭づつの龍を水平に、さらに左右両端の２裂に上向きと下向きの龍を金糸を用いて刺繍をする。この刺繍についてよくみると、中央とその左右の龍は水平向きの自然のすが手で著されているが、両端２頭の龍は水平向きに著された龍をあえて９０度回転させて用いているのが解り、幕両端の龍に限っては元は水平位置だったものを幕の変造に伴って現在の用な位置と形になっているものと考えられる。

・幕に刺繍している龍文様の位置を窺うに、屋台の前後と左右面に合わせて幕に龍が配置されているのが解り、そのことから推して幕の前後と左右の面が想定できるように思える。また幕の上辺端に付いている乳裂を見ると、屋台の面に合わせて幕の折れ曲がる箇所には乳を近接させて付けているのがいえ、こうした仕様から屋台に懸装された幕の屈曲部になる角位置が解るのであって、本幕を懸装した屋台の各面の長さと四本柱の位置が判明してくる。そこから向かって幕の右端部を後面袖幕と解して、右端から３２㎝の位置が屋台の左後の角となり、次の２９８㎝の位置が屋台左前部の隅角、またそこから１４６㎝の箇所が屋台右前の角部分に、らに３０６㎝の所が屋台右後の角となり、最末端が４４㎝が屋台後右側の袖幕部になって幕が懸かる。ただ屋台の前後および左右の面の長さに僅かな違いがあったりするのは幕が繊維製品ゆえに相応の誤差があるのは仕方ないといえよう。そして本幕は寸法の違った５裂を用いて製作されているが、それが前後左右の各面の角部と一致しない幕製作における不自然さが見られる。また本幕が現用の水引幕と大きさがにていることの偶然の一致も見られる。これらのことを考慮する必要があるだろうし、これらについて後述したい。

・さて雨龍の表現は繊細で覇気のある古風な形に描かれていて、中国清朝期１８世紀後半頃の乾隆年間の表現様式に倣って表わしているようだ。また刺繍に上質の金糸のみを用い、そしてその金糸を綴じる糸に数種の色糸を使い分け、微妙に金糸の色表現を変えるなど卓抜な繍技を見せている。こうした特徴ある繍技は我が国では１９世紀に入ってからのことだといえる。また色糸を用いて行われている唐撚糸繍い技法も殊に精緻であり、さらに龍の目に入れているガラスも古様な手吹きの鉛ガラスが用いられている。龍の爪に象牙や牛骨の材を用いずに刺繍技法で行なっているのも古調といえる。総体に１９世紀の前半を下らない製作仕様が考えられる。

裏面「茶色無地染木綿」と「宝相華唐草文様更紗」

・裏裂は茶色無地染の平織木綿布が使われているが、幕の上辺部のみを残して下方が全て切り取られている。また左右端の部分のみに宝相華唐草文様の更紗裂が用いられていて、風などで幕端が覗いて見えるこの幕端部の裏に限ってよく行われる加飾の仕様だといえる。またこの更紗裂の一部が切り取られているのがいえ、多分にそれを天井板に貼付して再利用しているのが考えられる。
・更紗裂は宝相華文様を合羽摺りをした型染技法になるもので、図柄は小幅生地一カマ仕様で、紋の送りもやや大きい。そして型彫の技法と彩色にも稚拙で古調な様子が見られる。１９世紀初期頃の初期和更紗製品が考えられるがどうだろうか。

3) 備考

・幕面は羅紗地の５裂を縫合して全体を仕立てており、そこへ雨龍１０頭を刺繍しているが、その配列をみると中央に２頭の龍を水平に、その左右に同じく水平の龍を３頭づつ、そして両の幕端に上昇と下降の龍を各１頭づつ配して著している。長い幕であると共にこれらの龍の配置から案じて、大概に幕中央の２頭を屋台の正面とし、その左右の各３頭づつが屋台の左面と右面、また幕の両端にある上と下を向く龍が屋台の後面に回って位置するのが解る。つまり、一枚の長い幕を屋台の胴回りを包むように巡らして懸装したのだといえる。
・ただ、このように屋台の胴部に引き廻して懸けただろう幕であるに拘わらず、幕全体が異なる大きさの裂地数枚を縫合して作られている。また幕の両端部の裂は改変されていることの解る仕様であって、決して当初からの形状を伝えていると思われない。つまり数枚の裂を縫合して裏地などに欠損を見る現状の幕仕様は何らかの理由と経緯があって、履歴の変更が見られる幕だと判断ができる。一案として屋台の新造にあたって旧幕を替幕や夜幕などとして利用するために改変したことが考えられ、それによって現水引幕に近い形状と寸法が見られるのかも知れない。
・ところで、『高山山王祭礼行列絵巻』に見られる鹿嶋踊り屋台図の胴幕は屋台角部に房を付けて４枚の胴幕に別けて懸かっているように見えるのだが、それに対して同品の本幕が一枚物の仕立てになっていることの不一致が見られる。憶測になるが、仮に最初の４枚の幕を後に縫合して一枚物に仕立て直したとするならば、幕の裂に縫合部があることに不自然がなく、また現在の幕が後面は両側の袖部になるのは見送幕を懸ける仕様のためであって、見送幕を用いなかった初代屋台の胴幕には後面があったはずであり、また龍の文様は左右や前面と同じく水平に著されていたはずである。現在の本幕の一枚物の形は二代目以降の屋台の形に合わせて見送幕を懸けて用いる形になっており、宵幕などに用いるために一枚物の幕に仕立て直し、幕の両端を後面の袖幕にして仕立直したものではないだろうか。その時に元の後面の２頭の水平の龍を両袖部に上向きと下向きに置いて縫合したものと思われるが、如何だろうか。こうした改変は他所の祭礼幕においてもよく見られる事例だといえる。現用の天連布胴幕と同仕様の一枚ものなのに若干の寸法足らずを見るのはそうした故で仕方なかったのかもしれない。何時しか「縹色羅紗地雨龍文様刺繍胴幕」も用いられなくなって、格納されたままになったと推察できる。

Ⅱ）天井幕　「宝相花唐草文様　更紗染」（現用の幕）（１枚）

1)仕様について

a)伝承および形態

・本幕は上段の天井に懸かる天井幕と呼ばれている幕で、宝相花唐草文様の更紗染小片の７裂を縫合して一枚の幕に仕立てている。古材を再利用して製作されているものと思われ、現状は更紗染の文様および色彩は明瞭でなく、一見では旧大幕の裏地の一部に使われている更紗染裂と同裂と気付き難いが、良く比較してみると同裂であることに間違いはない。

b)寸法　　…未採寸。

c)製作の仕様（素材、技法）

・幕表面

本紙　　…「宝相花唐草文様　更紗染」（左右両端部分の２ヵ所）

生地　…平織木綿。

経糸：木綿、Ｓ撚、密度：１７～１８／cm。

緯糸：木綿、Ｓ撚、密度：１４～１６／cm。

織巾：不明。

染技　…摺型友禅（合羽摺）

色彩：線描…カチン（墨）、赤…弁柄、青…藍臘。

紋丈：２０．７cm、紋カマ：生地幅で１カマ。

＊参考…本品と同裂（「宝相花唐草文様更紗」）が現屋台の天井板貼付裂に、裁断片７裂を貼り合わて用いられている。断片であることと退色具合からして胴幕両端裂の再利用が考えられる）。

2)考察

・上述のように旧大幕の裏地として一部に使われている更紗染裂と同裂で、小片の７裂を繋ぎ合わせて幕仕立てをしていること、また古材であるなどからして旧大幕の裏地を剥がして再利用をしていることが明瞭だといえる。

・詳細な製作年は解らないが、江戸後末期頃のものではないか。

◆秋祭「牛若臺」（櫻山八幡宮例祭＜八幡祭＞）所蔵の旧用幕類の調査。

・牛若臺の創建年代は未詳だが、天明の大火で類焼した高山照蓮寺の再建工事で生じた余剰木材を活用して屋台を新調する計画があがり、享和２年(1802)１０月に着工するも遅々として進まず、文化１１年(1814)に八幡宮の大神輿ができたことで気運も高まって、文政元年(1818)４月に屋台が完成した。完成当時の台名は「橋弁慶」とされ、下二之地中組加藤家の歩簫日記『紙魚のやどり』の文政元年の記事に「新出来屋台六基」とあってその中の「寺内組　橋弁慶」がそうである。

・天保元年(1830)に『牛若台』と屋名を改名するも、明治８年(1875)の大火で屋台を焼失する。「明治八年亥九月　牛若台諸書物　寺内組」とある小箱の蓋裏に「明治八年乙亥四　月二十四日十二時三十分に出火相成り候　屋台一式類焼相成り候　火元桐山源兵衛　其後　諸書物入　箱新調仕り候也」とあり、照蓮寺（別院）に収蔵していて災害に遭ったらしい。だが幸いに猩々緋大幕、紫縮緬天幕、墨絵雲龍図水引幕、簾、弁慶人形の長刀が難を免れたという。これらを収納する桐箱（長：１７５cm，幅：３０cm，高：３０cm）に「牛若台幕箱　天保七年(1836)八月新調」「内両組　邑山屋太右衛門組　立寺内惣代上野　　屋庄七」などの記載が見られる。

・明治８年の大火の類焼以後は仮の台名旗を作って祭礼に参加してきたが、昭和３年９月の天皇即位御大典を記念して白羽二重・黒糸繍文字の台名旗を製作して使用する。だがこの旗も修繕が必要となり、昭和６３年に京都で布部分と紐を１５０万円で新調をした。

・屋台があった時の幕類の懸装については、上段四本柱の上部に紫縮緬に天幕を張り、そして中段の胴部に猩々緋大幕を張り巡らし、前面の簾の間の上部で絞って括っていた、また中段の各面の上縁部に墨絵雲龍図の水引幕を懸けていたとされる。

・今回、牛若台が所蔵する旧幕類の調査を行ったのは、以下の旧用幕５枚と房１筋である。旧大幕「猩々緋無地羅紗」と旧天幕「紫色無地縮緬」、旧水引幕「雲龍図墨絵」は明治８年の大火から類焼を免れたものとするが、他については不詳。

Ⅰ，旧天幕	「紫色無地　縮緬」	（１枚）
Ⅱ，旧大幕（胴幕）	「猩々緋無地　羅紗」	（１枚）
Ⅲ，旧水引幕	「雲龍図　墨絵」	（４枚）
Ⅳ，旧水幕	「縹色紗綾形繋ぎ段文様　木綿」	（３枚）
Ⅴ，旧敷物	「緋色羅紗」	（１枚）
Ⅵ，旧飾り房	「黒房」	（１枚）

〇各幕の調査（概要）

Ⅰ）旧天幕　「紫色無地　縮緬」　（１枚）

1)仕様について

a)伝承（概要）

・旧牛若台の屋台懸装に用いられていた幕だが、屋台は明治８年４月２４日の大火で類焼をしている。しかし幸いに照蓮寺（別院）に収蔵して災難を免れ得た３枚の幕があり、その内の一枚が本幕である。幕類を収納する桐箱に「牛若台幕箱　天保七年(1836)八月新調」、「内両組　邑山屋太右衛門組　立寺内惣代上野屋庄七」などの記載を見るが、天保７年(1836)８月の新調された幕が本幕かとうかは不明。

b)形態

・小幅織物の縮緬裂３枚を横に並べ、それを上下に縫合した横長い幕である。裏地を付けず、上辺端部に懸装用の乳を付けている。屋台上段の四本柱に懸けて用いられた幕だと伝える。

c)寸法（乳部を含まず）

外寸　　…縦：４４５０㎜　×　横：１１７０㎜。

（附図７参照）

d)製作の仕様（素材、技法）

・幕表面

本紙　　…「紫色縮緬」

図様　…無地（紫染…後染：浸染加工）。

織加工…強撚糸織物（平組織：二越縮緬＜ＺＺＳＳ＞）

経糸…材：絹、撚：甘Ｓ　　、密度：５６／㎝。

緯糸…材：絹、撚：Ｚ（強撚）、密度：２８／㎝。

材：絹、撚：Ｓ（強撚）

織幅…４０３㎜。

乳裂　　…「黄土色平絹」

図様　…無地

寸法　…２２㎜×５５㎜

素材　…平絹

経糸　…材：絹、密度：５０／㎝。

緯糸　…材：絹、密度：３５／㎝。

織幅　…不明。

加工　…立鼓紋の護符飾りで本紙に縫合している。

2)考察

・紫染縮緬の幕は小幅縮緬織物を紫染して、それを横段にして３枚を縫合して幕を作られており、この縮緬織物は一般に二越縮緬と呼ばれるもので、縮緬織として古くから染加工用の白生地として製織されてきたものである。ただ本品は織幅が４０㎝とやや広く、また少し厚地の縮緬であって、一般に江戸後期の友禅染白地として流通していた類と異なるようで、新様の感がある。幕の上角端に白地のままに染め残されている箇所があるが、紫染は引染めができず浸染をしたことの作業痕跡だと思われる。

・乳裂は幕上端の縁の４７ヵ所にほぼ均等に間隔を置いて付けられているが、うち４ヵ所にあっては２個の乳が近接している処があり、この２個の乳の間が幕を懸装した時の角部になるものと考えられる。それらは幕に向かって右端から４４６㎝、１１９０㎝、８３５㎝、１２００㎝、４３５㎝の間隔であって、このことから上段の四本柱の設置間隔がほぼ解るのがいえる。幕を四本柱の内側と外側のどちらに懸けるかによって若干の違いを生じるが、つまり前後面の柱間が８３５㎝ 前後、左右面の柱間が１２００㎝ 前後だったのが想定し得るだろう。しかしこの懸装法では明らかに前後の面のどちらかが中央は開いて両袖に幕端がくる形となる。つまり前後のどちらかにその面のための別の幕が存在したものと思われる。もし前後のどちらかに幕を懸けない場合は袖幕部分を作らないはずである。多分に当初の幕も屋台後方に見送幕を懸装する様式だったろうと思われる。

3)備考

・古文書および伝承からして、本幕が明治８年以前の屋台に懸装されていたものなのは確実だろうし、また地厚な縮緬を用いた染色、さらに縫製の仕様などからして江戸後末期から明治初年頃の製作が考えられる。さらに旧屋台の規模や幕懸装の時代背景が窺える貴重な幕だといえる。

Ⅱ）旧大幕（胴幕）　「猩々緋無地　羅紗」　（１枚）

1)仕様について

a)伝承（概要）

・本幕も旧牛若台の屋台懸装に用いられていた幕で、明治８年４月２４日の大火による類焼から逃れた幕３枚の内の１枚である。前述の通り幕類収納の桐箱の蓋表に「牛若臺　幕箱　内　両組」、身表の横に「干時　天保七歳申八月新調之　邑山屋　太右衛門組」、同じく反対側の身表の横に「立寺内惣代　上野屋　庄七」、さらに身の横に「□□□□□□　小島屋幸助　旗屋藤蔵　三川屋□□□　小島屋□惣兵衛　古江屋伊与衛門　豊田屋清八」の当初の墨書銘が見られる。また蓋裏に貼紙をして「記　一猩々緋幕　壱張　一木綿水幕　壱張　一紫縮緬天幕　壱張　一龍幕　（壱）四張　但黒塗板五枚付　（當番飾幕　壱張　組紐付）　一黒大房　弐組半　一飾鉾　一壹挺　一鍔　壹個　一唐縮旗　壹旒　一長刀　壹振　一木綿旗　壹旒　但黒房弐個及網付　以上拾壹品　第壹組當番」と、身の横に貼紙をして「第壱號　１猩々緋幕　２龍幕　３龍幕つり板　４正面垂れ幕」とある。貼紙は前者が古く、後者は近年のものと思われる。こうした記載が見られるが、本幕天保７年(1836)８月の新調された幕が本幕かどうかは不明。

b)形態

・１２１０㎝の広幅と１０５㎝の細い幅の緋羅紗地を縫合して約１３１５㎝の高さとし、９ｍほど長大な幕を仕立てている。幕の上端縁の５２ヵ所の建装用の紐を通す乳裂を縫い付ける。幕左右端の下方隅部３０㎝×１０㎝ほど裂を欠いている部分がある。

c)寸法（乳部を含まず）

外寸　…縦：１３１５㎜　×　横：９０２０㎜。

（附：「図８」参照）

d)製作の仕様（素材、技法）

・幕表面

本紙　…「緋色羅紗」

図様　…無地（緋染色…後染：初期化学染料）。

織加工…平組織（起毛加工毛織物）。

経糸…材：毛、撚：Ｚ、密度：１６／㎝。

緯糸…材：毛、撚：Ｚ、密度：１２／㎝。

織幅　…不明（片耳あり…細い１筋の白線染耳：染加工跡）。

・幕裏面

裏裂　…「茶色平絹」

図様　…無地（柿渋また雑木染）

素材　…平絹（平組織）

経糸　…材：絹、撚：Ｓ、密度：１７／cm。

緯糸　…材：絹、撚：Ｓ、密度：１０／cm。

織幅　…３３cm。

・乳

素材　…別珍（平組織木綿織輪奈織物）

寸法　…４０mm×１４０mm

加工　…本紙部にかかる乳部分に浅葱色糸による立鼓紋の護符飾りを繍い、また本紙より外側乳部分に浅葱色細組紐を用いて総巻結び飾り房を縫い付けて垂れる。例のない仕様の組紐飾りで、しかも当初からの仕様ではなさそうに思える。

2)考察

・緋色羅紗地の色は欧州の初期化学染料を用いて染色された色調が窺え、また織耳に見る１点鎖線の防染模様は地色染の際に、生地を枠張りした加工跡であって、染色技術の発達経緯が知れる１９世紀中後期に欧州のどこかで製作された緋羅紗地である。
れる。１９世紀中頃に日本に舶載された緋羅紗織物ではないだろうか。

・木綿製平織物の裏生地はその材質と仕様からして、１９世紀中頃の江戸末期から明治初期頃の製織と思え、染色においても雑木染よりは柿渋を用いた簡易染色のように窺える。

・幕の上辺縁に縫合されている黒色別珍織物の乳裂も近代製品である。

・そして幕に付けられている乳を見ると、乳裂４個が接近して付く箇所が４個所に見受けられ、こうした仕様は乳裂４個の中間で屋台胴部の角になって幕が屈曲させて懸かるものなのを示しているのが解る。つまり幕の中央約１６１０cmが前面部分になり、その左右に２６２０と２６３０cmの左右胴部分が、そして幕の両端部の７８０cmと７９０cmが屋台胴部から折れて後面に懸かるものと思われる。幕の後面では幕両端の生地を重ねて懸けたと考えられ、両末端の下辺の裂の欠き部には舵棒などが位置したものと思われる。よって屋台の胴は前後面が約１６１０cm、左右面が約２６３０cmだったのではないかと考えられる。

3)備考

・上記のことからして、本幕が旧屋台に用いられていた大幕（胴幕）であることに相違はないが、製作期は１９世紀中頃以降の江戸時代末期から明治初年だと考えられる。収納箱銘に見る天保７年製作の幕ではないと考えられる。

Ⅲ）旧水引幕　「雲龍図　墨絵」　（４枚）

1)仕様について

a)伝承（概要）

・本幕もまた旧牛若台の屋台懸装に用いられていた幕で、明治８年４月２４日の大火から類焼を免れたとされる幕３種の内の１種である。前に同じく幕類収納箱に「牛若臺幕箱　内　両組」、「干時　天保七歳申八月新調之　邑山屋　太右衛門組」、「立寺内惣代　上野屋　庄七」、「□□□□□□　小島屋幸助　旗屋藤蔵　三川屋□□□　小島屋□惣兵衛　古江屋伊与衛門　豊田屋清八」の墨書銘が見られ、また貼紙に「記　一猩々緋幕　壱張　一木綿水幕　壱張　一紫縮緬天幕　壱張　一龍幕　（壱）四張　但黒塗板五枚付　（當番飾幕　壱張組紐付）　一黒大房　弐組半　一飾鉾　壹挺一鍔　壹個　一唐縮旗　壹旒　一長刀　壹振　一木綿旗　壹旒　但黒房弐個及網付　以上拾壹品　第壹組當番」、「第壱號　１猩々緋幕　２龍幕　３龍幕つり板　４正面垂れ幕」がある。ただし天保７年(1836)８月に新調されだ箱が本幕のために製作されたものかは不明。

b)形態

・高さ５０㎝強で長さ３ｍ強、そして高さ５０㎝強と２ｍ強が各２枚づつの計４枚で構成されている幕で、４枚共に墨絵で雲龍図が描いて上と左右辺の３方に縁を作って門構えの額縁仕様で仕立てられている。その形状からして水引幕だと考えられ、短い幕が前後面に、また長い幕が左右面に懸かると思われるのだが、各幕の高さに若干の相違があるのが気にかかる。明治年以降に当番飾り（会所飾り）ように仕立て直したとも伝えられており、それ故なのかも知れない。

・裏面に裏地を付けず、本紙部の裏をそのまま裏面としているが、上と左右辺は表面と同じく黒色別珍で門構え形に額縁仕立てをし、下辺に白色木綿布で縁を作っている。黒色別珍と白色木綿布を交えてではあるが四辺を囲む額縁仕立てであるのがいえる。

c)寸法（乳部を含まず）

前面　外寸…縦：５１０㎜　×　横：１９４５㎜。
　　内寸…縦：４３５㎜　×　横：１７８５㎜。
後面　外寸…縦：５３０㎜　×　横：１９４５㎜。
　　内寸…縦：４５０㎜　×　横：１７７０㎜。
左面　外寸…縦：５０５㎜　×　横：３０３０㎜。
　　内寸…縦：４２５㎜　×　横：２８７５㎜。
右面　外寸…縦：５２５㎜　×　横：３０４０㎜。
　　内寸…縦：４４５㎜　×　横：２８８０㎜。

（附：「図９」参照）

d)製作の仕様（素材、技法）

・幕表面

本紙　…「雲龍図墨絵　木綿布」

図様　…雲龍図を墨絵で描く。

織加工…平組織（手紡糸・手織り）。

経糸…材：木綿、撚：Ｓ、密度：１２／㎝。

緯糸…材：木綿、撚：Ｓ、密度：１３／㎝。
織幅…４５５㎜以上。

・幕裏面
裏裂　…本紙裏

・額縁
素材　…黒色別珍（輪奈織木綿布：輪奈切）

2)考察

・雲龍図墨絵は４枚共が瑞雲に飛龍を配した図柄だが、各々に構図を替えて描かれており、各面の右端部に白文と朱文の２顆の印が捺されている。印文が解読できず、作者は不明。
・前面幕の左方に鈎裂様の損傷が見るが修理されており、この箇所にあたる裏面１／４には黒色別珍裂が当てられて補強している。

3)備考

・龍図の作者が判明せず、その製作年代を語れないが、本紙となる木綿生地の材や糸質および織技の様子から推して、江戸時代末期から明治初期の製品が窺われる。
・上記からして、収納箱に記されている天保７年製作の幕を本幕に充てるには無理があるのではないだろうか。

Ⅳ）旧水幕　「縹色地紗綾形繋ぎ段文様　木綿布」　３枚

1)仕様について

a)伝承（概要）

・本幕は明治８年の大火から類焼を免れたと伝承される３枚の幕（天幕、大幕、水引幕）に充らないが、「牛若臺幕箱　内　両組」、「干時　天保七歳申八月新調之　邑山屋　太右衛門組」等の墨書銘がある幕箱の蓋裏に貼られた紙には「記　一猩々緋　幕　壱張　一木綿水幕　壱張　一紫縮緬天幕　壱張　一龍幕　（壱）四張　但黒塗板　五枚付　（當番飾幕　壱張　組紐付）　一黒大房　弐組半　一飾鉾　壹挺　一鍔　壹個　一唐縮旗　壹旒　一長刀　壹振　一木綿旗　壹旒　但黒房弐個及網付　以上拾壹品　第壹組當番」とあり、本幕はこの内の「一木綿水幕　壱張」に充るのではないかと推される。貼紙は明治８年以降に書かれたものだろうことはいえるが、内容からすれば明治８年の大火以前から伝わった幕だろうことも考えられる。ただ近年の貼紙に「第壱號　１猩々緋幕　２龍幕　３龍幕つり板　４正面　垂れ幕」の中に入っていないのは何故なのだろう。

b)形態

・高さが約１７０㎝前後で、長さが約(a)４．５ｍと(b)２．９ｍ、(c)１．３ｍの３枚の幕が遺されている。幕は小幅織物を左右に縫合して作られ、幕の真中より上方に筒描糊防染技法による１本の紗綾形文様の横縞を全面に通して縹色地に著している。(b)は紗綾形で段縞

を著した小幅木綿９枚を繋ぎ合わせ、また(c)も紗綾形の段縞の小幅木綿３枚と端に縹色無地の小幅木綿１枚を繋ぎ合わせたもの、そして(a)は(c)の縹色無地部を真ん中に挟んで(b)と(c)の２種の幕を縫合したものである。裏地は付けず。

c)寸法

(a)　外寸…縦：１６５５㎜　×　横：４５５０㎜。

(b)　外寸…縦：１７３５㎜　×　横：２９００㎜。

(c)　外寸…縦：１６６５㎜　×　横：１２７０㎜。

（附：「図１０」参照）

d)製作の仕様（素材、技法）

・幕表面

本紙　　…「縹色地紗綾形段縞文様　木綿布」

図様　…紗綾形繋ぎ文様。

織加工…平組織（手紡糸・手織り）。

経糸…材：木綿、撚：Ｓ、密度：１７／㎝。

緯糸…材：木綿、撚：Ｓ、密度：１０／㎝。

織幅…３４５㎜。

染加工…筒描糊防染技法（藍染・浸染）。

2)考察

・小幅木綿を用いて紗綾形文様を筒描糊防染技法て藍染加工し、それらを縫合して紗綾形繋ぎの段縞を構成して表現をしている。

・小幅木綿は手紡ぎの手織生地が用いられ、染加工は連続形の図柄に便利な型染技法　をあえて用いずに手糊筒描防染技法で行う丁寧な仕事が見られる。

・幕上辺端の吊紐はその大半が残されておらず懸装仕様の詳細は不明だが、(a)(b)(c)の３枚の幕を長さを合計すると８７２０㎜の長さとなり、前述した旧大幕（胴幕）「猩々緋無地羅紗」の９０２０㎜と幕長に大きく差がないものとなり、本幕も左右両端に無地部を置いて作られた一枚物の幕の形状が考えられ、旧屋台の胴部四辺に回して懸けられた幕ではなかったかと考えられる。

3)備考

・明治８年の大火以降に類焼を免れた幕類等を纏めて収納している箱がある。この箱には「牛若臺幕箱　内両組」、「干時　天保七歳申八月新調之　邑山屋　太右衛門組」等の墨書銘を見ることから、現存する幕類に該当するものがあるかを別にして、旧屋台に使われていた旧幕収納箱だったことは確かである。幕箱の寸法は１７０㎝、３０㎝、３０㎝であることから、仮に現存する幕の中から法量的に収納可能な幕を案じると先ず本幕「縹色地紗綾形段縞文様木綿布」が揚がる。本幕の製作期もその様式からして江戸後期頃が思われ、他に現存する幕類が江戸末期以降の製作だろうと考えられることに比して、天保７年銘の箱が本幕を収納した箱として考えるに不都合はない。さらに図様表現が古式な幕の外観からして緋羅紗大幕の

前に使われていた胴幕と考えねのも可能ではないが、どうだろうか。

Ⅴ）旧敷物　　「緋羅紗」　　１枚

1)仕様について

a)伝承（概要）

・本幕も明治８年の大火から類焼を免れたと伝承している幕ではないが、現在も組内に伝えられている古い幕の一つであり、大黒天を奉るときの敷物だという。

b)形態

・１８７０cm×１３９０cmの長方形に織られた緋羅紗織物で、両の端に二条の太い黒筋を染めて著している。大きさと形状からして敷物に利用されていたものではないだろうか。表面の起毛が長く、輸入緋羅紗の種類として後出のものといえる。

c)寸法

外寸　…縦：１３９０mm　×　横：１８７０mm。

（附：「図１１」参照）

d)製作の仕様（素材、技法）

・幕表面

本紙　　…「緋色羅紗織物」

図様　…緋色無地。

織加工…平組織（起毛毛織物）。

経糸…材：毛、撚：Ｓ、密度：９／cm。

緯糸…材：毛、撚：Ｚ、密度：８／cm。

織幅…３４５mm。

染加工…後染加工（化学染料）。

2)考察

・近世期末から近代に輸入された緋色羅紗織物で、本幕は大火後に記されたと思われる収納箱の貼紙にも記載が見当たらず、明治８年以降に入手して会所飾りの敷物として利用されてきたものではないだろうか。

Ⅵ）旧飾り房　　「黒房（中）２、黒房（中の小）３、黒房（小）１、黒房（小の小）１、萌葱房（小）１」

1)仕様について

a)伝承

・明治８年の大火から類焼を免れたと伝承される幕等が収納されている箱に、貼付されてい

る古い書付に「一猩々緋幕　壱張　一木綿水幕　壱張　一紫縮緬天幕　壱張　　一龍幕（壱）四張　但黒塗板五枚付（當番飾幕　壱張　組紐付）　一黒大房　弐組半　一飾鉾壹挺　一鍔　壹個　一唐縮旗　壹旒　一長刀　壹振　一木綿旗　壹旒　但黒房弐個及網付　以上拾壹品　第壹組當番」があり、これらが類焼を免れた備品の詳細を記したものではなかったかと考えられる。

・本品等はこのうちの「黒大房　弐組半、木綿旗壹旒　但黒房弐個及網付」のいずれかに該当するものと思われるのだが、現存する黒房は中が４個と小が３個、萌葱房の小が１個であって、大房と呼べるものがなく「木綿旗壹旒　但黒房弐個及網付」とみられるように旗などに付ける中小の房のみである。

b)形態

・黒房（中）２、黒房（中の小）３、黒房（小）１、黒房（小の小）１、萌葱房（小）１が現存するも、これらを付けていた本体が何だったかは全く想定し得ない。

c)寸法

黒房　（中）　　房長　…約２５cm（頭部分を含む）。
黒房　（小）　　房長　…約２０cm（頭部分を含む）。
萌葱房（小）　　房長　…約１３cm（頭部分を含む）。

d)製作の仕様（素材、技法）

・房の仕様は全てが頭付き様式だが、総体に簡易な製作のものであって房部分の損傷が著しく撚房また切房かの製作仕様は判断不明。

◆春祭「恵比寿臺」（日枝神社例祭＜山王祭＞）所蔵の旧用幕類。

・今回、恵比寿臺の所蔵する旧幕類の調査を行ったのは、以下の旧用幕１枚と敷物１枚。

Ⅰ，旧見送幕　　「異国人図　綴織」（１枚）
Ⅱ，旧敷物　　「緋色　毛氈」　　（１枚）

・「猩々緋幕並唐糸二長」の古記録、紐箱の蓋銘「幕絞紐三筋」が現存し、この幕が「梅八染抜の水引幕」と共に明和年中(1764-1772)に越前宰相より下附されたものであることから、既にこの頃に屋台が存在していたことが解る。また文化４年３月の山王祭礼触れが気の屋台曳順の条に「花子　大野屋惣左衛門組」とあり、当初の台名は花子で、後に殺生意思に改名している。さらに鳳凰臺組の「文政午年ヨリ天保十亥年三月迄　十八ヶ年　山王一条祭礼諸事留」と題した文書には全て蛭子臺となっている。

・また弘化３年(1846)から３年を要して大改造を行い、嘉永元年(1848)３月に完成して一新をする。

〇各幕の調査（概要）

Ⅰ）見送幕　「異国人談笑図　綴織」　（１枚）

1)仕様について

a)伝承（概要）

・高山屋台保存会刊『高山祭屋台とその沿革』に、「中段後面の勾欄より神明鳥居の貫木のない形の丸木枠を立て、笠木の両端に象頭彫金を嵌め、中央に青龍刀を頭上に立てた鬼面がくわえた幡形式の懸垂幕に、外国婦女が樹間に佇立し遠景の見える構図を織り込んだ古渡りの綴錦を、縁表層で仕立ててあるが、これは天保年中、オランダよりの密輸入品で京都西陣が秘蔵していたものを弘化年度大改修の際、譲渡をうけて調整した珍品である」と記載されている。しかし「（注）川島織物によると、日本風の織方である。京都で織られたものと推定　昭和五十九年」の添え書き入れを見る。

b)形態

・遠景を背景に異国人が談笑する景を織り上げた綴織を本紙とし、その周囲を錦織で額縁仕様に幕仕立てをした見送幕である。

c)寸法（乳部を含まず）

外寸　…縦：２４３０㎜　×　横：１４３０㎜。

内寸　…縦：１７１０㎜　×　横：１１０５㎜。

（附：「図１２」参照）

d)製作の仕様（素材、技法）

・幕表面

本紙　…「異国人談笑図　綴織」

図様　…異国人男女が談笑する風景図。

織加工…綴織（平組織・緯畝織物）

経糸…材：絹・白、　撚：Ｓ／２Ｚ、密度：　４３／曲寸。

緯糸…材：絹、色糸、撚：Ｚ／２Ｓ、密度：１５５／曲寸。

縁裂　…「鳳凰宝相華唐草文様　錦」

図様　…宝相華唐草に鳳凰文様。

寸法　…４裂（未採寸）。

素材　…錦織物（経綾地・絵緯全越変則平搦じ・錦）。

経糸　…材：絹・濁浅葱、密度：４８／㎝。

緯糸　…材：絹・濁浅葱、密度：２６／㎝。

紋　…丈　：２１．５㎝。

…カマ：１１．５㎝。

織幅　…不明（６０㎝以上）。

2)考察

・近年に本幕は京都の川島織物によって仕立直しが行われ、本紙綴織部分に和紙の裏打ち作業が施されており、また全体に洗いや剥落部の押え作業、補修および修復等の痕跡が見られる。修理は近年以前も確実に行われているが、最近とそれ以前の修理履歴の判別は困難である。

・図柄は外国風景を著しているが、綴織の経糸にＳ撚の絹諸糸、緯糸にＺ撚の絹諸糸が使われており、また流し織り技法が全く見られずして日本独自の綴織技法であること、さらに類品に西陣製のものが幾枚か存在していることなどからして京都西陣製の綴織だといえる。製作期については本幕の図柄の特徴と色彩から推して１９世紀前半期の製作が考えられる。
・なお見送幕の額縁裂に使ってある「鳳凰宝相華唐草文様錦」は、江戸後期の織技法の特徴を持つ織物で、厳格な図柄と共に精品であることがいえる。

3)備考
・本幕の図様は異国の婦女子が談笑する図柄で綴織の図でも珍しいものだといえる。
・昭和３４年刊高山屋台保存会『高山祭屋台とその沿革』に、「外国婦女が樹間に佇立し遠景の見える構図を織り込んだ古渡りの綴錦を、縁表層で仕立ててあるが、これは天保年中、オランダよりの密輸入品で京都西陣が秘蔵していたものを弘化年度大改修の際、譲渡をうけて調整した珍品である」とあるが、上述の説明のように京都西陣製の作品であるのに疑いはない。
・本幕の図様と似る綴織の幕が散見できるので以下に記載する。
　　1,祇園祭黒主山・前懸幕「南蛮人五立像図　綴織」
　　2,亀岡祭蛭子山・見送幕「蘭人図　綴織」
　　3,亀岡祭高砂山・見送幕「異国人図　綴織」
　　4,伊賀上野天神祭薙刀鉾・見送幕「蘭人嬉遊図　綴織」
　　5,余呉ちゃわん祭中村組・見送幕「蘭人嬉遊図　綴織」
　　6,高山祭　　台・見送幕「洋人遊邸図　綴織」
　　7,熊川宿白石神社旧祭礼下ノ町・見送幕「胡人雅話図　綴織」が見られる。
・以下全文は本報告書の高山祭鳩峰車の項に同文であり、重複するが載せておく。
熊川宿の見送幕「胡人雅話図　綴織」は未見のため除き、他の６点は数人が談話する南蛮人また蘭人を描いた図様であり、その表現形式も背後に風景と共に著すという同様な図が描かれている。ただ背景図が洋風と和風の違いを見るも、全体の構図は似ていて、色彩も同様な特徴がある。
・伊賀上野天神祭薙刀鉾・見送幕「蘭人嬉遊図　綴織」は蘭人が海岸で談笑する図で、裏面の白色木綿布上縁に「此の物　天明三年九月　渡＊百五十余年　明治三十に年十月十五日縫替　裁縫ハ　六十五　永井又五郎」の墨書が見られ、江戸後期の天明３年(1783)に幕が製作され、明治３２(1899)年に補修と仕立て直しが行われたのが解る。
・亀岡祭高砂山見送幕「異国人図　綴織」の箱の表に「文政八乙酉歳　九月吉日　高砂山見送」、蓋裏「丁内＊主　京都六之助時代　誉田屋両家　矢代庄兵衛　矢代庄五良」とあって、文政８年(1825)の製作が解るが、蛭子山見送幕「蘭人図　綴織」については記載がなく不明。
・祇園祭黒主山・前懸幕「南蛮人五立像図　綴織」、余呉町ちゃわん祭中村組・見送幕「蘭人嬉遊図　綴織」についても古記録がなく製作年は不明である。
縮緬天幕　壱張　一龍幕　（壱）四張　但黒塗板五枚付　（當番飾幕　壱張　組紐付）　一黒大房　弐組半　一飾鉾　一壹挺　一鍔　壹個　一唐縮旗　壹旒　一長刀　壹振　一木綿旗

壹旒　但黒房弐個及網付　以上拾壹品　第壹組當番」と、身の横に貼紙をして「第壱號　１猩々緋幕　２龍幕　３龍幕つり板　４正面垂れ幕」とある。貼紙は前者が古く、後者は近年のものと思われる。このような記載を見るが、天保７年(1836) ８月に新調された幕が本幕にあたるかは不明。

・殊に亀岡祭蛭子山の見送幕「蘭人図」は人物配置や風景構成、そして日本絵画に殆ど描かれることのない羊が描かれていることの特異な点の共通性が窺える。

・また伊賀上野天神祭の図柄も人物配置や風景の構成がよく似ている。上野天神祭の綴織に裏面に「此の物　天明三年九月　渡自百五十年余　明治三十二年十月十五日縫替　裁縫ハ　六十五　永井又五郎」と記された布片が貼付してあり、この種の綴織の製作年について資料となる。

・縁裂の錦の製作年代を考慮しても、本幕が弘化年度の大改修の際に譲渡をうけて調整したと伝えることに不都合はなく、製作年はそれよりも遡るのではないだろうか。

Ⅱ）旧敷物　「緋色　毛氈」　（１枚）

（本品に付いては未調査であり、概感のみを記す）。

・本品は薄赤紫の退色した色調を呈するが、元来は鮮やかな緋色の毛氈だったと思われる。羊毛を精製圧縮して縮絨したフェルト製品を蘇芳染して、敷物類に用いられていたと思われる。中国南方辺から我が国へ舶載されたもので、江戸後期から近代の昭和戦前頃まで多量に輸入されていたと聞くが、本品は江戸後期から近代初期に舶載された古様な製品である。

以　上

◆参考文献、資料

『高山祭　屋台とその沿革』　昭和３４年　高山祭保存会

『八幡祭と屋台』　昭和６３年　日下部　省三　桜山八幡宮

『高山祭屋台雑考』　昭和５６年　長谷　三朗　慶　友　社

『高山祭り屋台の祖形について』　平成１７年　祭屋台等製作修理技術者会

『山王一条祭礼方＊留』　文政５～天保１０年（鳳凰台）

『歳々勘定記』　昭和８年起　（鳩峰台）

『幕翠簾出来并奉加取立覚』　享和１年　（鳩峰台）

『祭礼年々勘定帳』　寛政１１年　（鳩峰台）

『春圃日記』　（鳩峰台）

『更紗メイド・イン・ジャパン』　平成２７年　堺市博物館

『祇園祭山鉾懸装品調査報告書国内染織品』平成２６年（公財）祇園祭山鉾連合会

◆後記

・調査にご助力と資料提供の協力を賜った方々のお名前を記して感謝を申し上げます。

（敬称略）

平田　邦彦　　鳳凰臺組加役長（組総代）。

川上　富子　　鳩峰車組。

柴原　功　　高山・祭屋台保存技術協同組合、懸装幕類製作「四季彩」主催。

尾崎　啓介　　高山市教育委員会文化財課　課長。

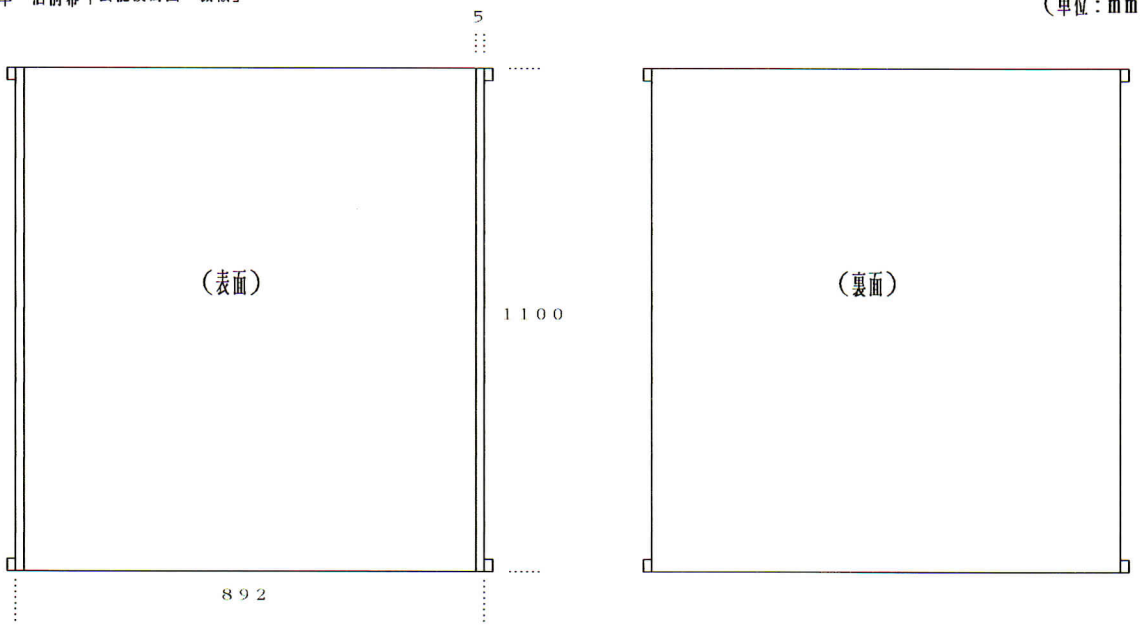
牛丸　岳彦　　高山市教育委員会文化財課伝統文化係　係長。

藤枝　智紀　　高山市教育委員会文化財課伝統文化係　主事補。

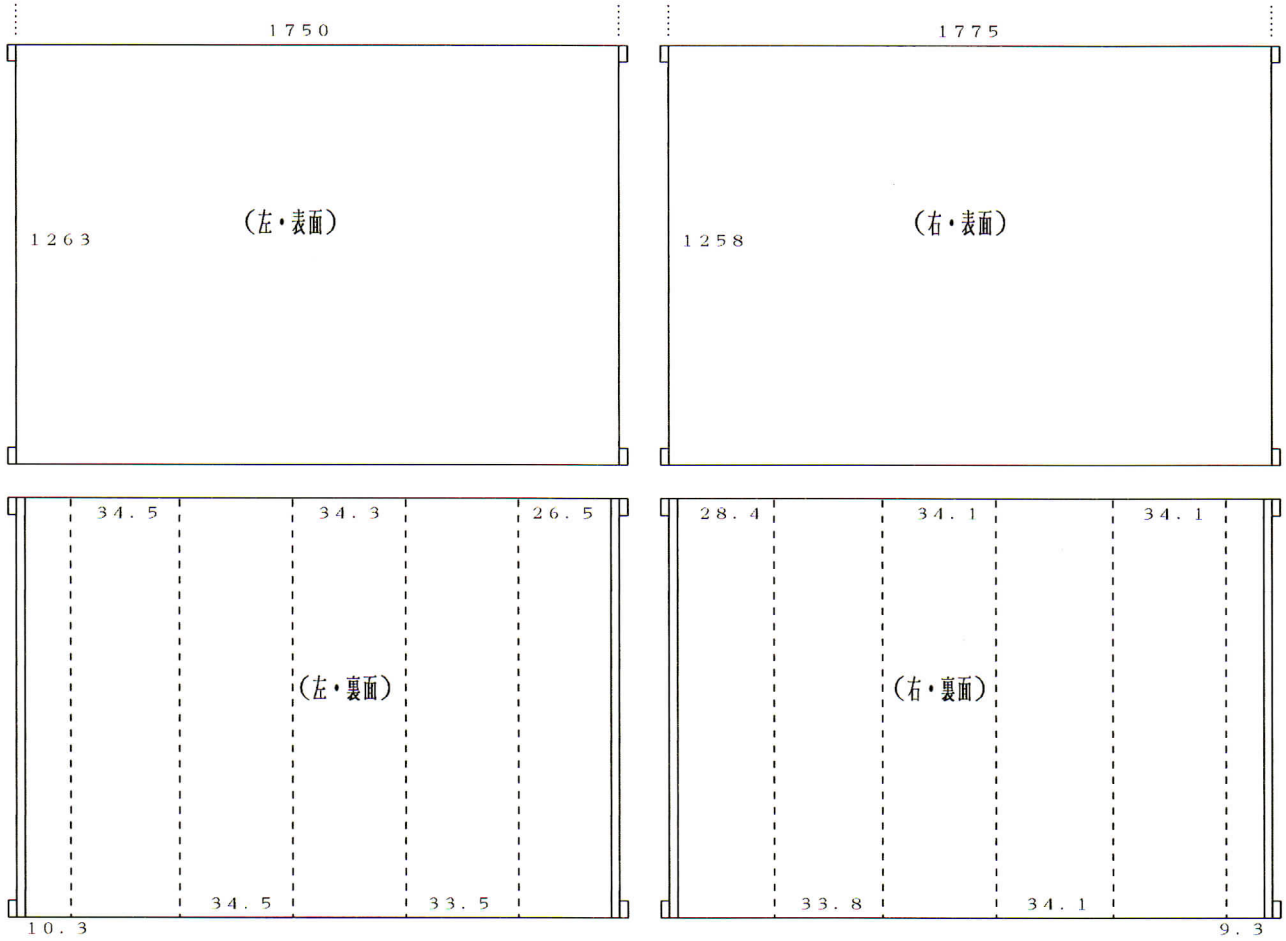
青木　俊郎　　高山市教育委員会文化財課「飛騨高山まちの博物館」学芸員。

図・1　鳩峰車　旧前幕「雲龍波濤図　綴織」

（単位：mm）

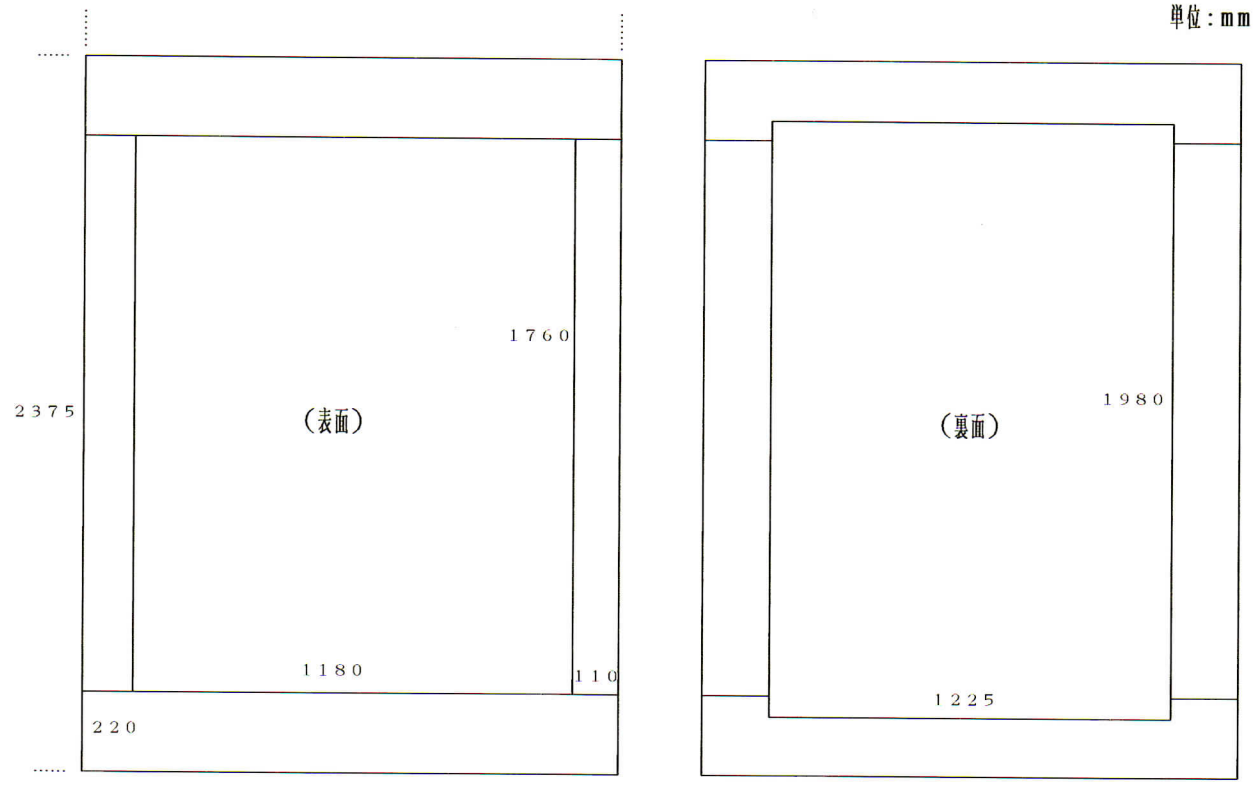


図・2　鳩峰車　旧胴幕（左）「唐人海岸談笑図　綴織」・旧胴幕（右）「唐人浜邸遊苑図　綴織」

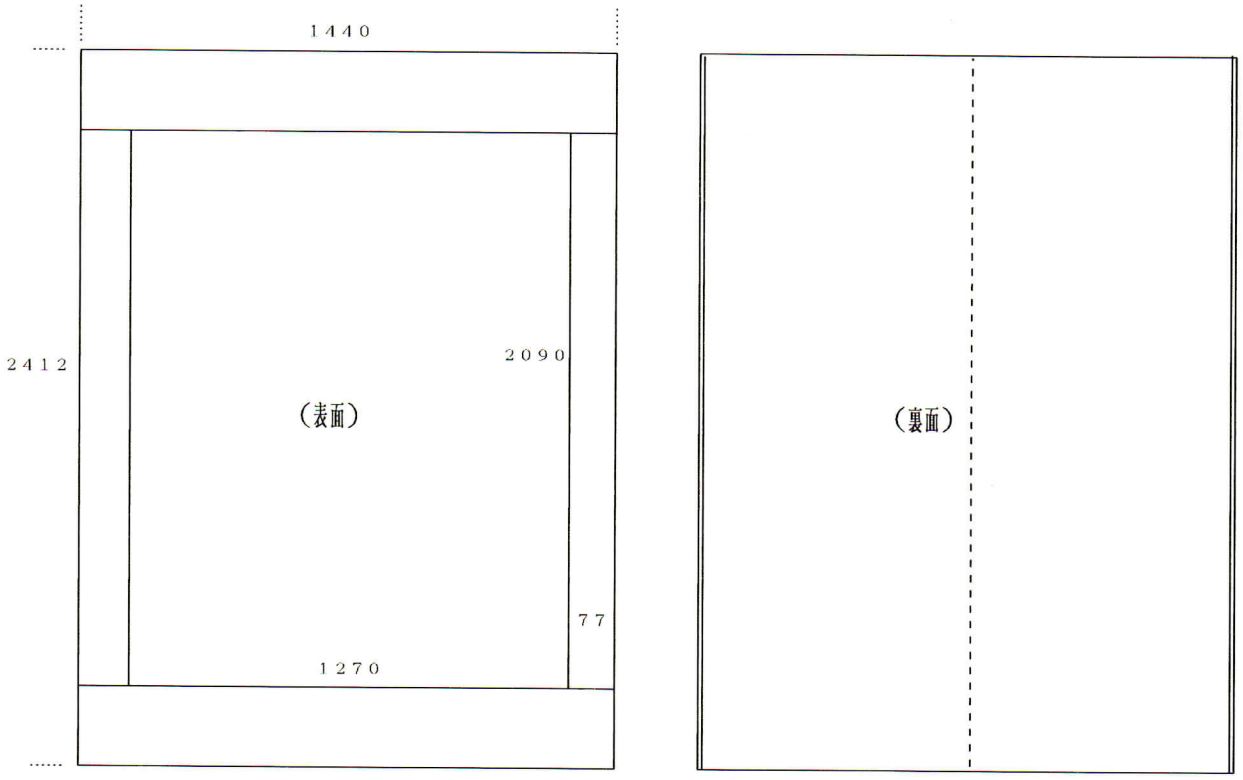


図・3　鳩峰車　旧本懸用見送幕「日月立物人図　綴織」

単位：mm

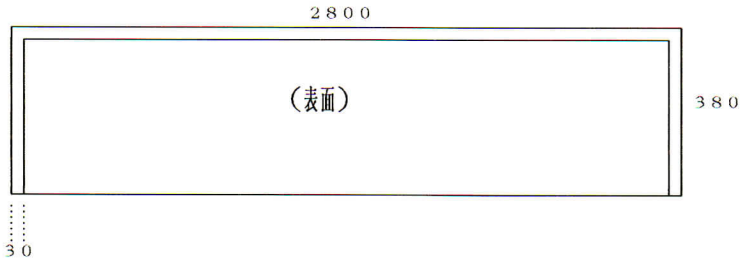


図・4　鳩峰車　旧替懸用見送幕「鳳凰額高土逆苑図　綴織」

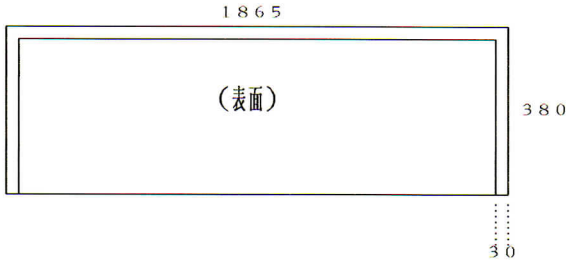


図・5　鳩峰車　旧水幕、袖幕「緋地牡丹蝶文様　刺繍」、「緋地菊蝶文様　刺繍」

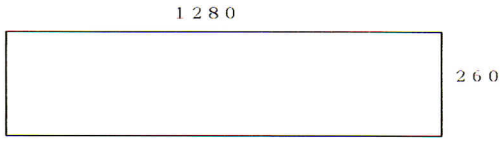
（単位：mm）



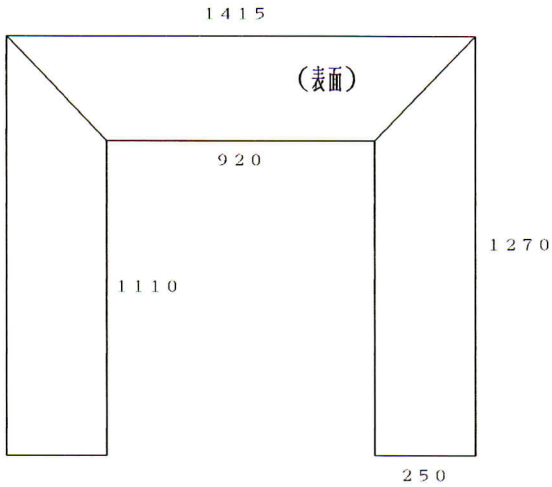
X　2枚　（左胴）
（右同）



X　2枚　（前胴）
（後同）



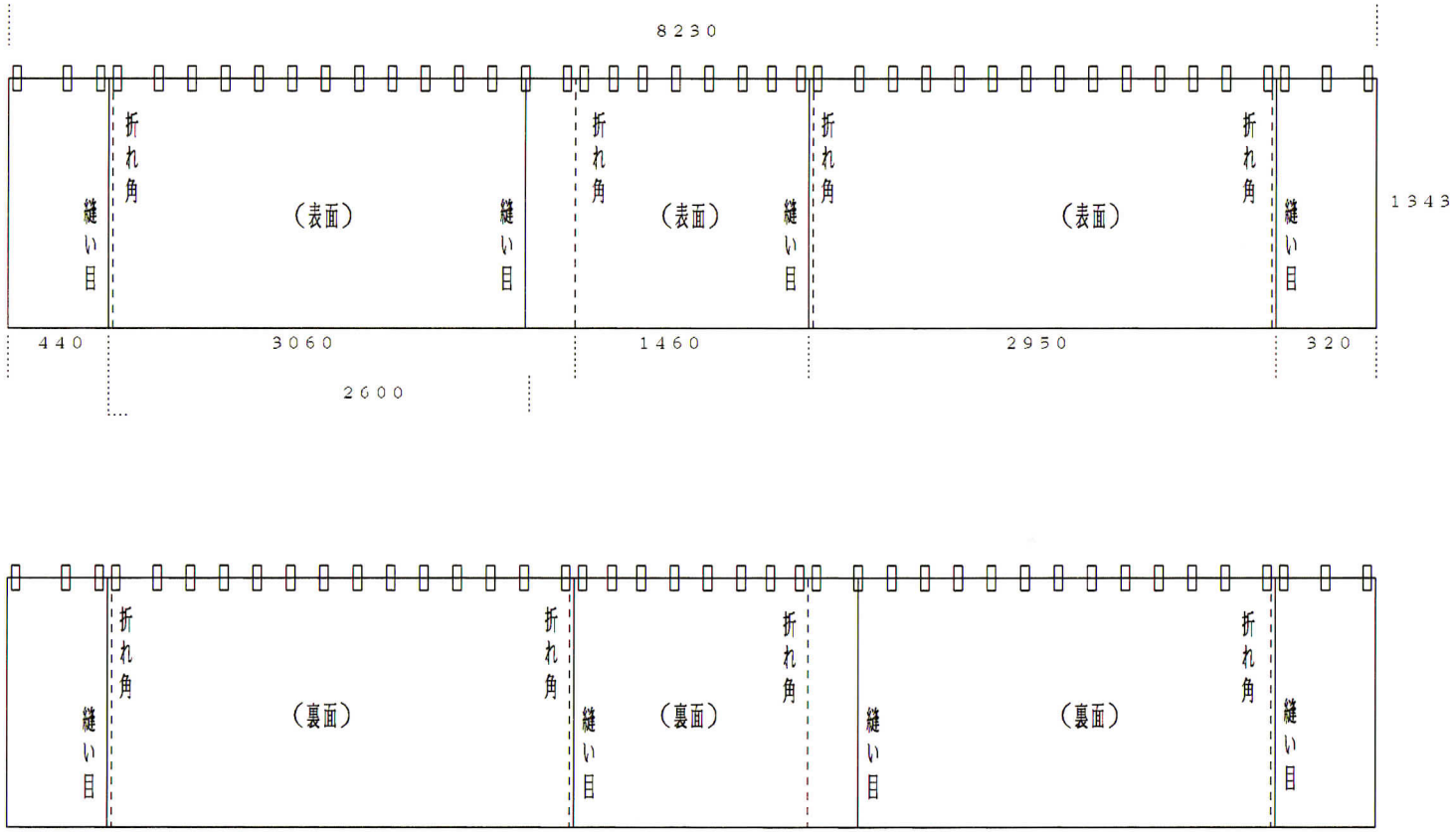
X　6枚　（左胴袖2枚）
（右同袖2枚）
（後胴袖2枚）



X　1枚　（前胴）

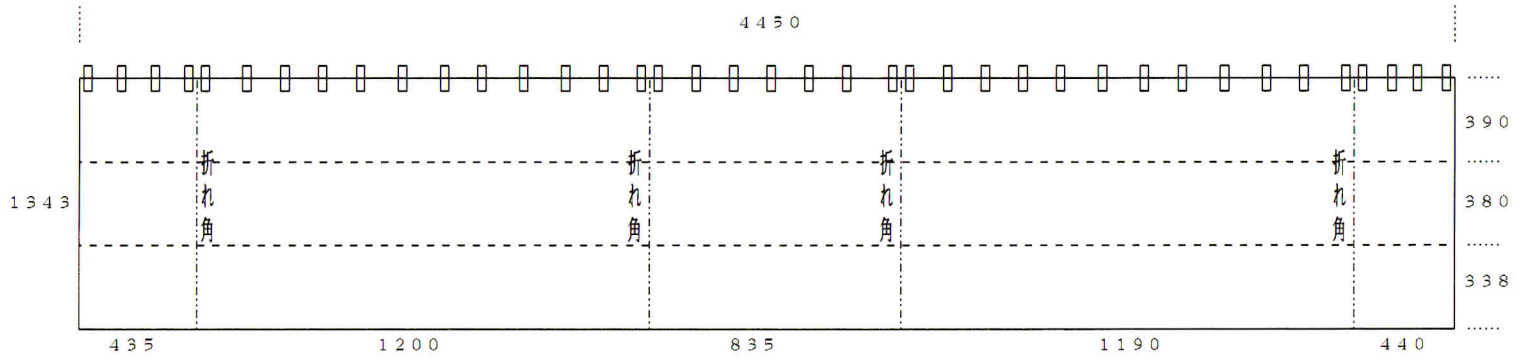
図・6　鳳凰臺「縹地雨龍図　刺繍」

（単位：mm）

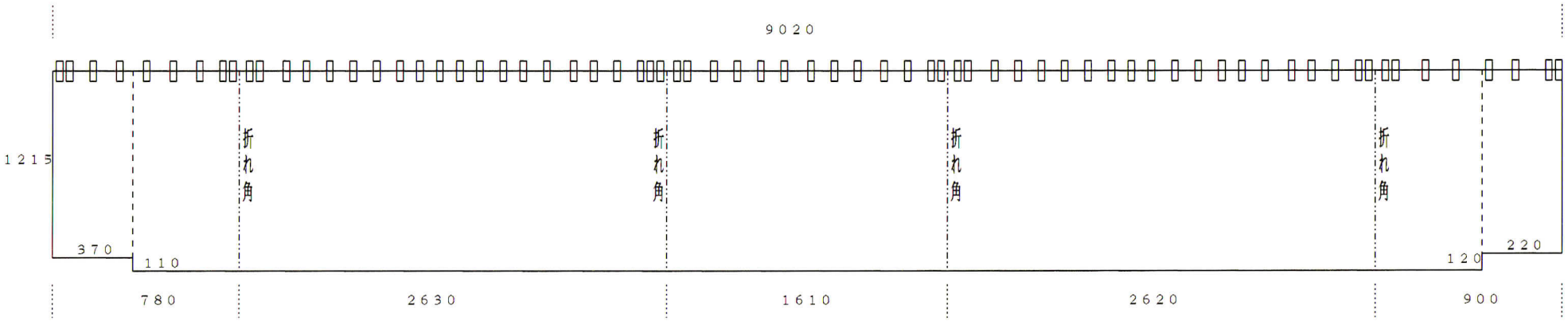


図・7　牛若臺　旧天幕「紫色無地　縮緬」

（単位：mm）



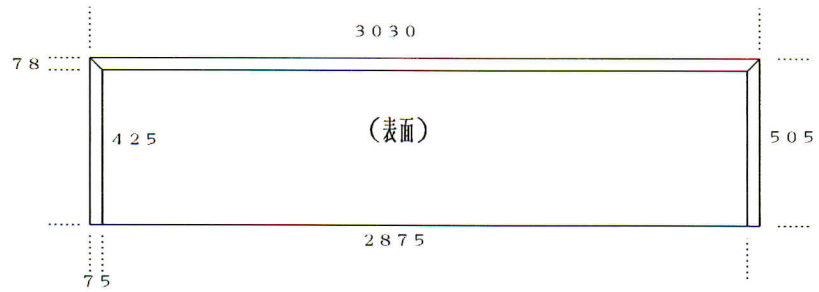
図・8　牛若臺　旧大幕「猩々緋無地　羅紗」



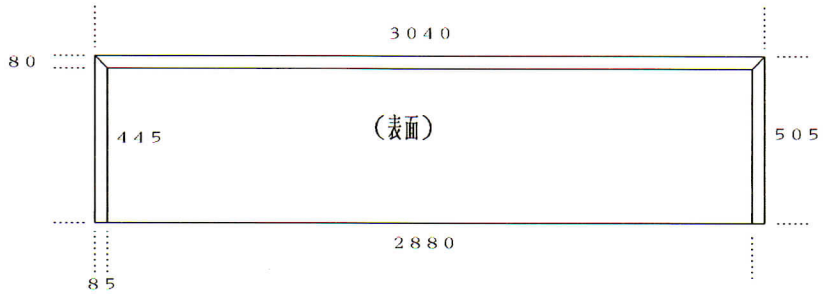
図・9　牛若臺　旧水引幕「雲龍図　墨絵」

（単位：mm）

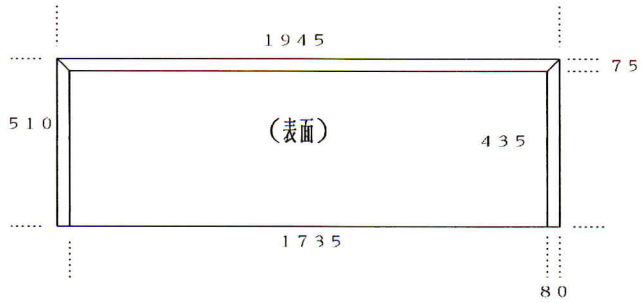
左胴



右胴



前胴



後胴

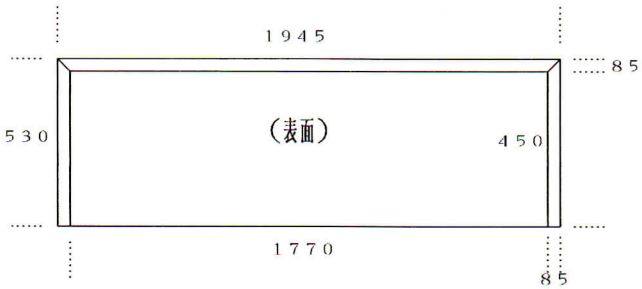
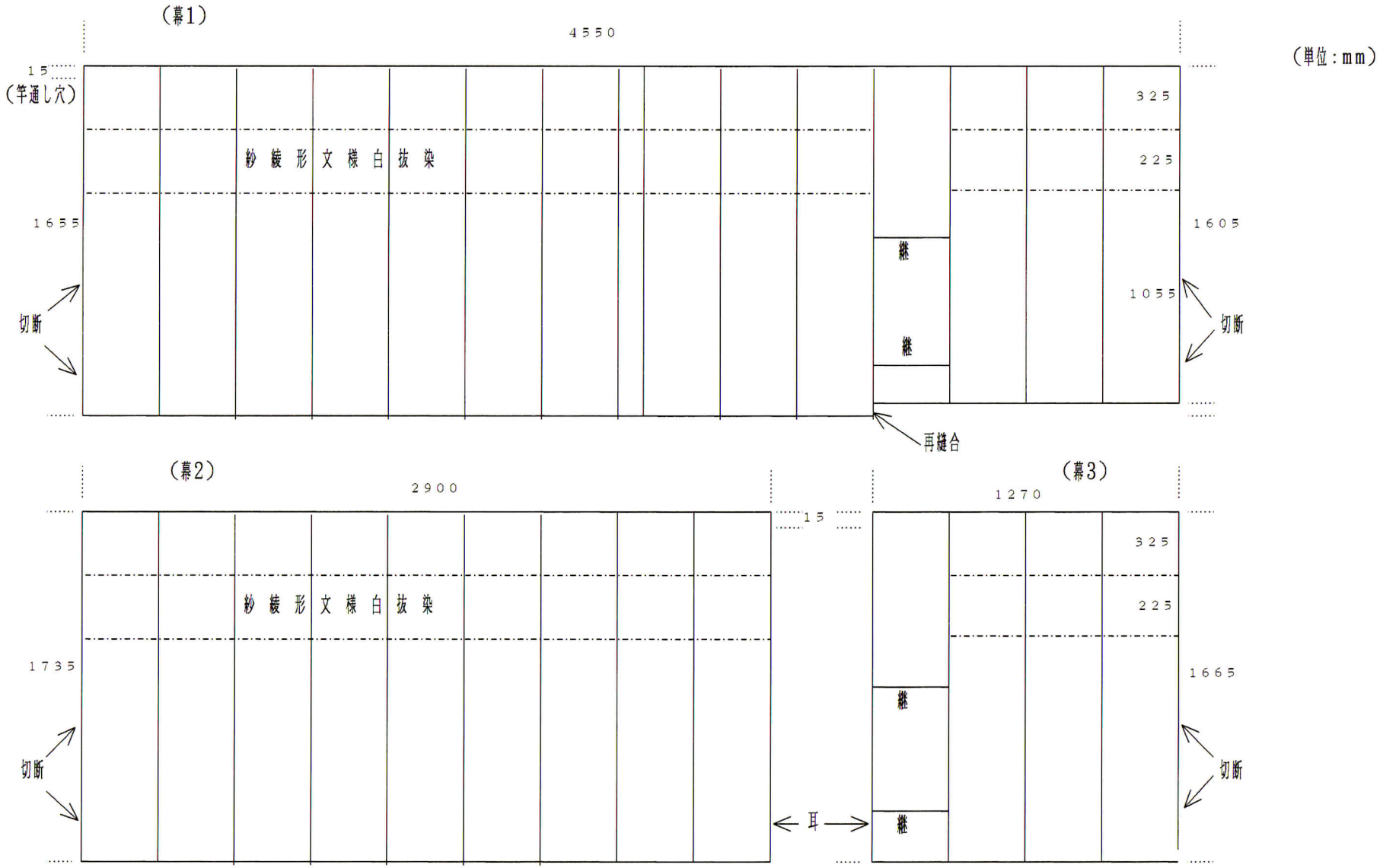
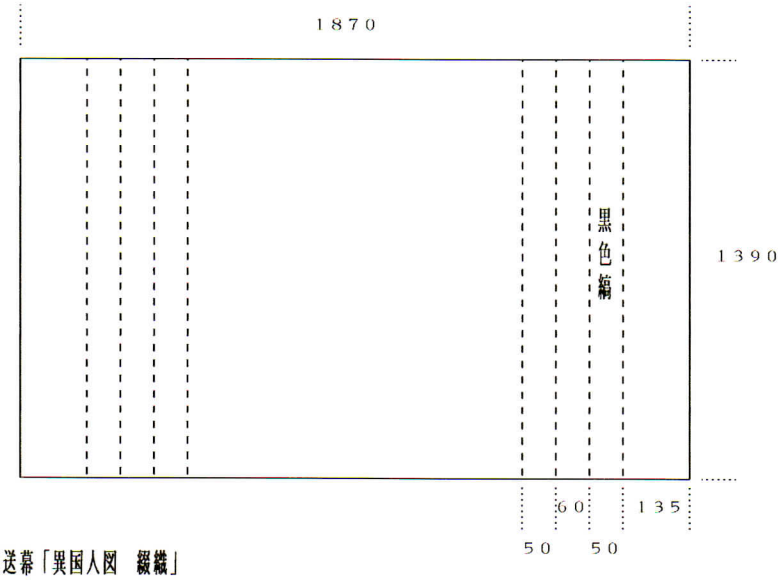
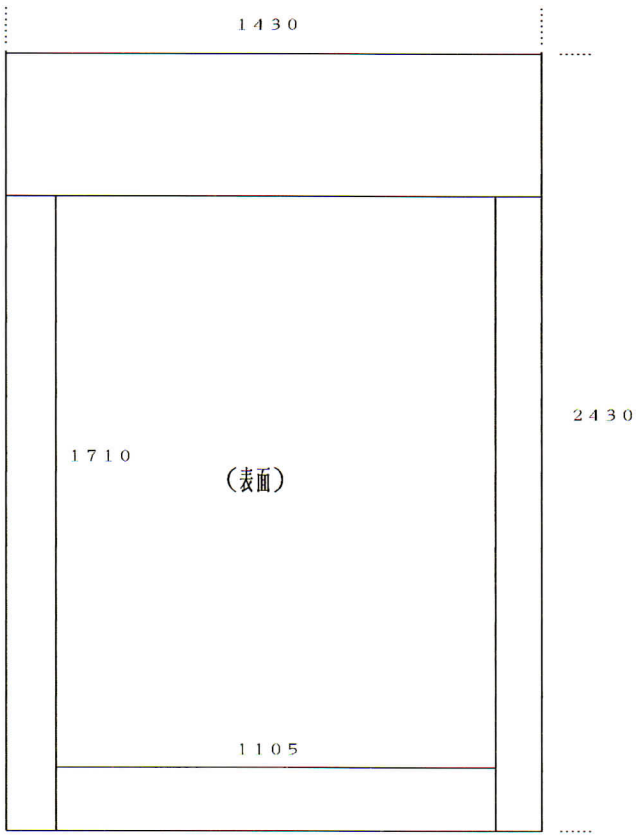


図10　牛若臺　旧水幕　「浅葱地紗綾形縞　木綿」



図・11　牛若臺　旧敷物「緋色　羅紗」

単位：mm



図・12　恵比寿臺　見送幕「異国人図　綴織」